

The image shows the interior of a restaurant with a warm, minimalist aesthetic. A long, light-colored wooden table runs along the left wall, which features a large window with vertical wooden shutters. A long, low wooden bench with a dark cushion sits in the foreground. The ceiling is made of horizontal wooden slats and is lit by several small, warm-toned spotlights. The floor is dark wood. On the right wall, there is a small framed picture.

建築人

10

2012

建築人

10
2012

目次

大阪ホンマもん

建築人

矢田朝士

Gallery 建築作品紹介

豊里学園

設計 二井清治建築研究所 施工 花谷建設

和泉乳児院・和泉幼児院

設計 二井清治建築研究所 施工 松井建設大阪支店

ジオタワー高槻ミューズフロント

設計 大林組・日本設計設計共同企業体 施工 大林組

大正製薬大阪支店

設計 竹中工務店 施工 竹中工務店

武庫川女子大学総合心理科学館

設計 清水建設関西事業本部一級建築士事務所 施工 清水建設

スーパークート宇治大久保

設計 井上守建築事務所 施工 下岡建設

楡の木テラス

設計 石井良平建築研究所 施工 林建設

記憶の建築 松隈洋

社会保険横浜中央病院 1960年 ホスピタリティの原風景

匠の巧

無垢材挽き板 朝日ウッドテック株式会社

ひろば 岡田圭司

ボランティアから仕事へつながるまちづくり

大阪府建築士会活動報告 岡本森廣会長

社会に必要なとされる建築士の団体を目指す

テクノロジー 大喜多孝哉

武庫川女子大学 甲子園会館―旧甲子園ホテルの再生―

インフォメーション・事業案内

理事会報告 建築相談 編集後記

大阪ホンマもん解説

写真 田籠哲也 文 牧野高尚

旧・大阪新歌舞伎座は昭和三三年（一九五八年）に千土地興行株式会社が大阪歌舞伎座の後継劇場として計画。場所は南海難波駅の北西、御堂筋西側に位置し、当時のななば大映跡地に建設された。

設計は村野・森建築事務所村野藤吾氏によるもので、施工は大林組が担当。地下三階・地上八階建ての鉄骨鉄筋コンクリート造で客席は三層で構成されており、収容人員は一六三八名。開場から翌年までは歌舞伎興行を行っていたが、それ以降はより新しい興行を目指し、「座長芝居」や「歌手芝居」などを、月替わりで公演することで成功を取めた。

その後も、演劇や歌謡コンサートなどを

軸に興行し、庶民の劇場として愛され続けたが、二〇〇九年六月に最後の興行を行い、五一年に及ぶ劇場の歴史に幕を下ろした。銅板で葺かれ安定したフォルムの大屋根と、連続する唐破風の織り成す心地よいリズムが与えられたファザードは、竣工当時は商業主義的デザインと批判されたりもした。しかし、歴史という風景をまとい、時代をのり越える華やかさを持つ本物は、御堂筋に大阪らしさを誇るシンボルとして在り続けた。

現在の新歌舞伎座は、上本町の旧近鉄劇場跡地に建てられた「上本町 YUTURA」に平成二二年（二〇一〇年）に移転している。この旧近鉄劇場（当初は近鉄会館）や旧近鉄百貨店阿倍野本店も村野氏の作品であるが、残念ながら建て替えが進んでいる。複合ビルにテナントとして入る劇場ではなく、本物の劇場建築として建てられた、華やかなる「建築美」を目に焼き付けておいて頂きたい。

大阪ホンマもん



閉場前の賑わいある風景（撮影：Toshi/Osaka at Night）

建築人 10

2012

監修 社団法人大阪府建築士会 建築情報委員会

編集 建築情報委員会『建築人』編集部

編集人代表 米井 寛

編集人 荒木公樹 橋本頼幸

曾我部千鶴美 筑波幸一郎

牧野高尚

事務局 山本茂樹 母倉政美

印刷 中和印刷紙器株式会社

建築人

矢田朝士

kenchiku-bito

建築そのものではなく、建築に関わる人に焦点をあて掲載する「建築人（けんちくびと）」。人のもつ魅力は、職域を越えても理解しあえると考えます。創作の源泉や姿勢、人生哲学、ライフスタイルなどを垣間見ることで、共感できる気づきを得ることを期待しています。

第三回目は現在、若手建築家として注目されている矢田朝士さん。矢田さんは、代表作「ES house」を通して、人と自然・空間との新しいあり方の提案を続けています。氏の生き方の哲学やライフワークでもある旅について、そして建築への姿勢などをうかがいました。

やだあさし

1967年京都市生まれ

1992年神戸大学工学部環境計画学科卒業

1992年無有建築工房

1998年ATELIER—ASH設立

2007年IBECサステナブル住宅賞

「優秀賞」

大阪府建築士会「渡辺節賞」

2008年日本建築家協会「新人賞」

日本建築士会連合会賞

2011年日本建築家協会「関西建築家

大賞」他

撮影：田籠哲也

生き方の哲学・建築への動機

森本 矢田さんは京都の出身ということですが、最初に生い立ちの中でご自身の考え方の基となったものについて聞かせていただけますか？

矢田 僕は京都の太秦出身です。自然が好きなのですが、たぶん小さいときから自然に結構かわっていったからです。ボーイスカウトをやっている、キャンプでは生きている鳥の首をひねって、首を落として血を抜くという経験をしました。鳥を食べるとはこういうことだというのがそのとき初めて分かったんですね。自然の中で寝て、起きて、行動して、「こういうものが実は地球なんだな」と分かって、たぶんそこから始まっているんですよ。外に出て行って、体を動かして何かを理解していったのだろうと思います。

森本 それは経験的なものを大切にしたいということでしょうか？

矢田 そうですね。学問はとても大事だと思いますが、最後に自分の血になっているかどうかというのは、そこに自分がどこまでプラスアルファをしているのかにかかっていると思います。僕にとって、学問よりもまず経験の方が先にあって、経験を補完するのが学問だと考えています。先に体が覚えてくれないと、

僕は入っていけない。北 建築に進もうと思ったきっかけは何かあるのでしょうか？

矢田 もともとモノをつくるのが好きでした。僕は商店街に住んでいたのでお店などの改装が多くて、日常的にいろんな工事がありました。何かをつくっているのを見ていたら面白いですよね。そういった世界が好きだと思って、高校のときに西岡常一（注1）さんの本を読んで「かっこいい。宮大工になりたい」と思ったんです。でも、宮大工は一子相伝だという話で、その世界には入れないと思い知りました。そして大学に行き、ひとまずは建築に進んだ。そこでは「設計なんて」と思っていて、とりあえずモノをつくりたいだけ思っていた。安藤忠雄さんを知らなかったですからね（笑）

北 安藤さんの名前が出ましたが、「ES House」での打ち放しや外部空間との関係も、「住吉の長屋」と比較できると思うのですが意識はされますか？

矢田 安藤さんの建築は学生の途中から好きになりましたね。分かっていくとすごい。ただ、自分と違うところというのが、安藤さんは住んでいる人が向こうの部屋に行くときに傘をささないといけないという状況をつくる人。僕は、雨は入るけれども、人が通る所には軒がある。

これは非常に大きな違いで、たぶんそれは空間が先行するのではなく、住まい手について僕は理解することから始めようとする。人によって大事な部分ってあるでしょう。クライアントにこういうことをしますよと言ったときでも、どこまで提案を取り込んでもいいのか、最後は住まい手が決めると。僕が竹原義二さんに教えてもらったことは、僕たちはクライアントにまなざしを向けないといけないということですよ。

旅について

北 よく旅に出かけるそうですが、長い間行っておられた話を中心にお聞かせください。

矢田 まずきっかけですね。最初の旅は大学四年のゼミ配属の前に一年間休学して行きました。配属希望の研究室である重村力先生には旅先からレポートを送る条件で許可をもらいました。

奥河 大学時代を含めて、今までどこを旅されていましたか？

矢田 北米、中米、南米、ヨーロッパ、アジア、北アフリカです。もともとは遺跡を見たいと思っていたので、最初の旅行ではマヤ、アステイカ、インカをまわりました。一度、世界中を全部行きたいからと計画を立てたんです。そしたら

駆け足で行っても十年かかる。仕事一年、旅一年でも二十年。でも毎回は一年行けないし、もし一回二ヶ月となると六倍かかる。そうすると自分の人生の中では全部は無理だと。また年を追うごとに一つの国に長く行くようになっていくんです。そして旅中に、よいと聞けば、予定を変更してでも行ってしまいます。例えば、アフリカに行ったときに、サハラ砂漠が最後に、海に入って終わっているかっこいいポスターがあつて、「これ、どこ？」と、現地の人に聞いたら、「西サハラの端のほうにあるよ」と言われて、予約していたバスをキャンセルして行ったりしました。

森本 昨年のJIA兵庫会のアーキテクトサロン（注2）で、砂漠の写真を拝見しましたが、濃い青と黄金色の砂漠の境界がとても印象深かったです。

矢田 僕は旅行中に建築も見に行きますが、それ以上に現地の人に会うのがすごく好きで、好きな国と思ったらいい思い出がある所になります。そして、そういった所で生活したいと思っています。しかし、そこに定住するという考えとは違うんですよ。僕はおかれた環境に自分を合わせるタイプです。でも海外へ行くと現地の人にとって僕は外の人なので、その土地でのルールすべてを求められるこ



上段：太秦の風景（昭和40年台末頃）
中段：ティカルI号神殿（グアテマラ）
下段：サハラ砂漠（アルジェリア）
写真撮影
中段・下段：矢田朝士

（注1）宮大工・1908年奈良生まれ 法隆寺解体修理、薬師寺金堂、西塔などを再建。1981年日本建築学会賞受賞
（注2）第100回アーキテクトサロン建築家の系譜シリーズ第二弾（2011年3月）



とはなく、かなり気楽でいられます。それに比べて家のある京都にずっといることはしんどいですね。滞在する事と根を下ろす事とは異なるのです。

仕事と生き方のスタンス

北 旅行と仕事とのバランスはどのようになっているのですか？

矢田 今までは自分の生きるスタイルの方を重要視していたから、スタッフを雇っていませんでした。住宅系の仕事であれば、半年設計、半年現場で一年がかかります。自分の時間がなくなってしまう。その次の一年の中でどこへ行こうと決めて旅に出ていました。帰ってきたら次の仕事は、すぐ進まないから実際は少し余白があり、仕事等の準備や雑務をしたりしていました。

中澤 旅行中に仕事の依頼があればどうしようといった思いはないのですか？

矢田 それは若干ありますね。特に「生活どうしているの」とか言われることもあります。でも、それを考えて旅に行かないということは、たいして行きたいと思っていないということでしょう。

中澤 では、仕事より旅がメインになるわけですか？

矢田 本当を言うとそうなんです。僕がずっと考えていたのは、どこか旅に出

クライアントと思いを突き詰めていく

荒木

今日はこのインタビュの前に矢田さんが設計を手がけられた大阪江戸堀の蕎麦屋「江戸堀 若木（二〇〇二年）」に伺いました。テーブルは非常に緻密な木目を持つ檜でできており、檜の質感をよく活かしたデザインで、思わず撫でてしまうくらいよいものでした。外への視線の抑え方が落ち着きを生み、開口部のディテールも空間の奥行き感を強めています。本物が持つ材質感と、天井のルーバーから開口部への視線などのバランスがよくとれていて、空間とそこで働く人やお客さんが一体的になって非常に清々しい雰囲気だと思いました。

矢田 「江戸堀 若木」は今から十年前に完成しましたが、私自身すごく気に入っているんです。もともとはどうどんがメインのお店だったのを、オーナーの「蕎麦好き」が高じて北新地で有名な「喜庵」に修業に行き、材料も厳選したものを使ったお店にしたいとのことでした。普段の生活でも、きちんと自分が納得できるものを選ぶということを実践されていて、それは僕の考え方と同じだと共感しました。店づくりに当たっては、実際に経営する人や物をつくる人がどのような考え方でやっているか、僕は、それに合わせていきたい。だから料理の素材にこ



て、旅先で誰か友達になって、仕事を頼んでもらって、仕事をして、そのお金で次に行つてというのを繰り返せたらいいなと。そういうことをずっと言っているんですよ。なかなか難しいですけども、できたらいいですよね。

北 多作ではありませんが、非常に密度の濃い建築をつくられていると思います。設計のときは、一つにかかりきっているというやり方ですか？

矢田 はぼそうですね。僕は、結構しつこく、「どこまでもよくしたい」と思います。それは竹原義二さんのところで学びました。繰り返し、期限の限り、こをもう少しよくしようという一生懸命考える。僕は当時大阪から京都に帰っていたので終電があったのですが、竹原さんは僕が帰ろうとする頃の終電ぎりぎりに事務所に戻ってくるんです。僕が頑張つて考えた案を「うーん、まだもう少しとやな。もう少しと考えると」と言われるのです。そうして竹原さんは夜中の二時、三時に起き出してくるんですね。そのときに「所長、無理です。これだけ考えて、よくできたでしょう」と言ったら、竹原さんは「そしたら、おれも考えるわ」と一時間くらい考えて案を持ってきたら、それがすごくいい。それで負けたと思って、やつぱりもつとやらないと

だわっているのだったら、建築も素材にこだわりたいと思いました。

北 オーナーと価値観が共有出来たのですね。

矢田 そうですね。例えば普通のお店であればお品書きの札を掛けるでしょう。それはやめてほしいと伝えたところ、オーナーも「そうだね」と応じてくださりました。テレビや雑誌も可能な限り無しにしよう。オーナーはベストな状態でお客さんに来てほしいと考え、僕は、可能な限りベストな場所をつくる。特に素材の使い方や外との関係には注力しました。何でもオープンにした建築も見かけますが、それは違うんですよ。オープンとクローズの間をうまく見て、基本は視線を切るが部分的に抜ける。そして風を入れられるように、考えました。北 ディテールで考慮された部分をお話し下さい。

矢田 客席の天井裏には設備がいっぱいあるので、ルーバーによってできる限りに表に現れないようにしています。お客さんがそういったものによって妨げられずに、できるだけ食事や会話に集中できるようにしたいと思いました。また、テーブルも実は蕎麦を食べやすい高さに設定しました。天板の高さを下げること、いい位置まで蕎麦を上げて食べやすいよ



いけないと思った。だから今でも本当に自分でいいと思っても、まだあるんじゃないかと思つてしまっています。

無有建築工房での修行時代

北 竹原義二さんの事務所に入られたきっかけを教えてください。

矢田 第一に僕はモノづくりが好きで、日本の技・工法・意匠を知り、材料（石や木）を使いこなし、左官ができる人のもとに行きたいと思いました。調べてみると作品的にも僕が好きな雰囲気を持つておられるのが竹原さんでした。あとはそのまま竹原さんのところへ「お願いします。僕なんでもしますから。嫌でも入りますから」と言つて無理やり押し掛けてしまいました。

北 どのような修行時代だったのでしょうか？

矢田 竹原さんのところでは、やりたいと思えばどんなやらせていただき、そのうちに担当者として任せてもらえて、現場もある程度任せてもらえました。しかし、素材の考え方とか、寸法のとり方とかで、竹原さんが絶対的に決める部分がありました。竹原さんは現場が好きで、時間があれば現場に行かれていました。こだわるところはしつこくこだわります。竹原さんは自分が好きなことに没

うにしています。人によつては天板と椅子の間が狭く「足が当たる」と言つて批判されるけれども、いやそれは違うと。あくまでも蕎麦を楽しくいただくためなんだと説明しています。

写真ではなく五感で感じる

北 「江戸堀 若木」は実際に行つてみるとプランでは分からなくて、例えば化粧室の壁と天井には隙間があり、そこに天井のルーバーが通つていたりして立体的な空間構成を感じます。それは、「[E]nvironmental Shell house」にも共通しているように感じます。

矢田 僕のつくる建築はいつも言われるんですが、プランで見て「分からない」という人もいれば、「プランで見ているのと実際つくっているものは何か違うね」という人もいます。それは、多分に僕自身がプランと同時に見え方だけではなく、空間を体験したときの感じ方を意識したつくり方をしているからだと思っています。一番分かりやすい例は格子です。写真で見るときの格子の見え方と、人間の目で見える感じる格子は、全然違うのです。格子をどういうものとしてつくりたいのか。例えばデザインのどう見せるのか、内外を区分けするときにどう感じてもらおうとするのか。そこに行つて、



頭してしまふ。いつまでも、「こうやつたらよくなるだろう」とずっと考えておられました。今では、その気持ちがわかります。自分で期限は決めてはいませんが、僕も同じことをしてしまいますよね。

北 いつ頃独立を考えられましたか？

矢田 竹原さんの事務所では六年弱ぐらいいいました。前半の三年は勉強をさせてもらつて、後半の三年は前半で得たものを返すといったところでしょうか。それは両親から教えられました。実家が美容院をやっていたのですが、技術を教えるには時間もコストも掛かるということ、一人前になったからといってすぐ辞められると、全然見合わない。それは経営の立場としてはあり得ないので、教えてもらつてできるようになったら、それと同じ時間をちゃんと教えてくれた人に返す、新しい人に教える。そうしたら次につながっていく。また、自分できると思いはじめると、今度は竹原さんとの差を考えてしまうわけですね。僕はこうやろうと思つているのに、竹原さんはこちらの仕上げでいいこうという。フォルムが一緒だけど、仕上げが違ふんですね。その違いが明確になって、いつ独立しようかと考えていました。

どう感じて、それがどういう効果を生むのかということについて考えます。人間は三次元で体験する中で空間が記憶として残っている。なおかつ、見る方向があるので、正面だったら格子は視線が抜けていくけれども、ちよつと角度を振つただけで面になる。写真で美しく見せようと思つたら、ちよつと空き気味の方がいい。しかし、実際はそういつた格子は空き過ぎで、格子越しの空間との距離感が近すぎる。間を空けたいときは、もう少し格子を詰めないといけない。どちらを考えるかが大きな違いなのです。なおかつ光の話もあるでしょう。内側は暗くて、外が明るかったら、どちらが見えるか。写真ではわからないというのは、例えば「[E]S House 02（二〇〇九年）」のファサードのルーバーも、写真で見ればとても閉鎖的です。でも実際、中に入って部屋から外を見ると、全部よく分かるのです。それは実際に体験しないと分からないんです。

北 格子については、隙間の空きや格子の見込み（奥行）寸法を原寸で描いてみたり、今までの事例を参考にしたりして、検討するのでしょうか？

矢田 そうですね。やつてみないと分からないので、自分で納得するためにも毎回やつてみて決めています。この場合は

上段：江戸堀 若木（2002年）
中段・下段：ES house-02（2009年）

写真撮影
上段：田籬哲也
中段：網巻豊
下段：市川かおり

上段：所員時代の矢田朝士氏と竹原義二氏
中段：建築士会インタビューでの竹原義二氏
下段：インタビュー当日の風景
写真提供
上段：矢田朝士
写真撮影
中段・下段：田籬哲也



上段・中段：ES house-01
(2005年)
下段：ES house-02 (2009年)
写真撮影
上段・中段：網巻豊
下段：市川かおり

これくらいでいいかと決めてしまうと、やはりできたものが違ってしまふ。建築やまちは写真で見ても分らない。分かったつもりになるだけです。あくまでも写真は、数字のような情報の一つであって、それ以上のものでもない。香りもなければ、湿度もなければ、感情もない。そんなものでは何も理解できていないのです。

ES house-01 12C 32

中澤 「ES house-01 (二〇〇五年)」では、鉄筋コンクリートで造った外側の躯体とその内側に造られた入れ子状のポリウレムの二重の構成になっていて、その二つの隙間を外部空間として扱われています。内側のポリウレムは鉄骨造と木造で使い分けられているようですが、これはどういうふうにして決めておられるんですか。

矢田 これは単純なんです。個室1、2の間に風を通す道をつくっていますよね。そして個室への通路としています。他にも通れもしない余白をいっぱいつくっているでしょう。どうやってクライアントを説得しようかと、先に考えた結果なんです。このときは、個室の壁を薄くすればいいだろうと考えました。普通の木造なら壁厚が一六〇ミリ程度になる

ものを半分にできたら、八〇ミリ余ります。それが四枚あれば、三二〇ミリのすき間を空けることができます。これだけ頑張って余白を作っているのだから不利益はなく、この余白に風が通るというメリットがあれば、どこにもロスはないとクライアントに伝えることができます。そして、施工については、フレームを工場で作って現場で並べると、あとは合板で固めるだけでとても楽だと言えます。こうなるとフレームは鉄骨屋さんというよりも、金物屋に近いレベルに変わり、工事手順やコスト的にもメリットがある。そうやって内側の個室の部分は鉄骨造としています。

ES house-02 のエピソード

北 「ES house-02」はコンペで選ばれたのでしょうか？

矢田 そうです。クライアントは「ES house-01」の写真を雑誌でご覧になっていて、そういうのがいいと。それで「ES house-02」を提案したらボツになったのです。僕は、こうしたら冬寒いですよ、風が入りますよと、いつも説明しているからです。庇が架かっているけれど、その横で雨が降りますよ。そうしたら、ちよつと無理だという話になって、提案し直しました。普通の閉じた家に戻って

基本設計を進めて、OKが出たので実施設計に入るところでした。ちょうどそのときに「ES house-01」を見学できる機会ができて、クライアントを案内したのです。真冬だったのですが、「これなら大丈夫です。やり直してください」と言われました。それは僕にとってはうれしいうち、最初が空庭の上の三つが開いていて、二つはガラスで塞いでいました。しかし、工期が遅れて事前に決めていたアフリカ行きが迫っていました。クライアントには最初から伝えていましたが、残工事を全部チェックして、引渡しの段取りを終えてからアフリカへ旅立ったのです。アフリカの旅中に、日本では大きな台風が来てしまつて、空庭のところ当たった水が結構はねることがわかりました。帰国後、クライアントから後始末が大変だと言われて、驚きました。僕は雨がなかったサハラにいたから

(笑)。大雨の話を聞いて、「ほお、いいな、潤っていて」みたいな。それで、吹き抜け上部のスリットを全部塞いでほしいと言われたんですよ。でも、それは絶対良くないという話で、ポイントを聞いていて、最終的に開いている所と閉じている所というふうになっています。もともと壁際のスリットは屋根の雨がずつと滝になって庭に落ちるから面白いでしょうと、話していたのですが、やはりクライアントにとっては結構な滝だったらしくて、部分的に流すようにしたという変更がありましたね。

北 空気の流れの考え方は基本的に同じで、雨に対する調整をしたということですね。

現場との対話・施工者との関わり

河野 作品の発表に当たっては、ほぼ全ての職方にわたって施工担当者の名前まで記されています。何か特別な理由があるのでしょうか？

矢田 施工の技は僕にはできないことだから、職人の方には感謝しているということからです。ただ、自分の思いを形に実現するためには、例えば自分で壁を塗ってみせて「僕ならばこのくらいできます。プロはこれに絶対勝たないとおかしいですよね」という話もします。また

など考えるのです。

進藤 素材とか空間の大きさというのは、空気感をコントロールするための手段であって、目的はその空気感なんです。

矢田 そうですね。僕はあくまでも物ではない、目に見えない所に重きを置いているからです。

素材について

中澤 素材についてですが、テーブルの天板で錫(すず)を使われることがあると知ったのですが、あまり建築では使われない材料です。

矢田 いろいろな材料に関心を持っていることは確かです。錫は「江戸堀 若木」でも使っています。その後「帷子の家(二〇〇七年)のダイニングテーブルの天板でも使いました。「帷子の家」では、光の反射を主題におっていました。いろいろな光を取り込みたいと考え、ガラス、和紙の銀張り、ステンレス、鉄などを使い、他にももっとあればトライしてみようと思いました。錫は他の金属と比べると木に近く、触った感じが柔らかくて温かい。酒器として冷たいものを入れても、熱いものを入れても柔らかに感じられてよいですよ。それだったら、天板に使ってもいいのかと考え使ってみました。

「こう見せたいから、こうできますか」と聞いたとき、「できません」と言われたら、「なぜですか。こう考えたらできませんか」と言っ、一〇も二〇も案を出します。僕は考えずに「できない」と言われることが嫌いです。いままでの経験でコスト的にできないことだったら、「コスト的にできない」とか言ってもらつて、「そしたら違う方法を探しましょう」という感じでやります。可能な限り突き詰めお互いにベストを尽くすようにしています。

ES house の法規上の取り扱いについて

河野 「ES house-01」「02」の空間を実現するために、例えば法律や制度面でどういった苦勞があったのか詳しく聞かせていただけますか？

矢田 外部空間と内部空間の区別が基準法上の観点からするとあいまいです。特に「01」のシックハウスの換気について、あくまでも部屋内に外気を入れなさいという事で、その外はどこなんだという話です。「外室は常時外気が流れているので、これは外と見ていいですか」という話から始まって、「じゃあどの程度外気が抜けるのですか」という話にもなります。あと「02」では、瑕疵担保保

したのですが、そこでは安全性を確かめることで解決しました。しかし、今度は

内と外の関係の解釈が市役所と違って、また他に相談に行き直し、それで数カ月たってしまったということがありました。

設計手法について・空気のポリウム

進藤 設計時のスタディは、スケッチを通して進められるのでしょうか？

矢田 スケッチというよりも、頭の中で考えることが専らです。絵がうまければ描いていたと思うのですけど。僕はプランを考える際、壁で区切ることを考えているのではなく、空気のポリウムを考えていきます。例えば「ES house-02」は、立地が大きく影響していて、T字路の突き当たりで、かつマンションもあり周りからの視線にさらされています。そこに寝室が要となったときを考えます。寝室というのはまず安心感が要で、朝のさわやかな光が入ってきて、少しだけ透明なポリウムだけれど、外からは見えない穏やかな空気感で造ろう。と。一方、家族が集まる場所はどう少し気楽に考えます。例えば二箇所に分けてつくり、それらを繋ぐ空間に自然を取り込む。明暗の具合や、外部の感じ方を設定します。するとお互いを往き来するときに楽しい



上段：ES house-02 (2009年)
中段・下段：帷子の家 (2007年)
写真撮影
上段：市川かおり
中段・下段：網巻豊



上段:矢田氏の事務所風景
写真撮影
田籬哲也

左頁写真撮影
網巻豊

聞き手

北 聖志
1976年 大阪府生まれ
2001年 神戸大学大学院(博士課程前期)修了
2001年 二井清治建築研究所
2007年 THINK一級建築士事務所設立

河野 学
1979年 大阪府生まれ
2008年 大阪大学大学院(博士後期課程)修了
2008年 大阪大学大学院特任研究員
2009年 大阪府立工業高等学校講師

中澤 博史
1969年 大阪府生まれ
1992年 近畿大学理工学部建築学科卒
1992年 株式会社大建設
1998年 中澤建築設計事務所設立

森本 雅史
1974年 三重県生まれ
1998年 京都工芸繊維大学大学院(博士課程前期)修了
1998年 株式会社東畑建築事務所
2009年 森本雅史建築事務所設立
近畿大学工業高等専門学校 非常勤講師

進藤 勝之
1969年 広島県生まれ
1993年 広島工業大学工学部建築学科卒
1993年 アイ・エフ建築設計研究所
1997年 彦谷建築設計事務所
2003年 住友不動産
2007年 Atelier SETTEN設立

奥河 歩美
1976年 兵庫県生まれ
2001年 神戸大学大学院(博士課程前期)修了
2001年 共同設計株式会社
2007年 O+O architects
2010年 空間計画株式会社

本特集責任編集人
荒木 公樹
1971年 大阪府生まれ
1995年 神戸大学工学部建築学科卒
1995年 建築環境研究所
2003年 空間計画設立

錫は一口に錫ではなく合金です。金属の混ぜ具合で柔らかさが変わってくるんです。「帷子の家」で使っているのは、可能な限り柔らかい状態のもので、かなり温かい。柔らかくて、うねって下地を拾ってしまう位です。

生き方の表れとしての建築

北 矢田さんの代表作である「ES house」には「01」と「02」がありますが、1つ目を計画しているときから「01」という名前を付けていたのでしょうか。この名前にご自身の建築に対するコンセプトが込められているように感じたのですが？

矢田 これまで、クライアントからの条件があって、それに対する答ばかりを考えていました。しかし、「ES house-01」を考える際、確かにクライアントの言葉に対する回答がメインではあるけれども、自分なりの考え方を核として持ち、かつそれを強めていきたいと思いました。また、いくつか違うパターンでもやっていきたいというのがあったから、「01」と名付けて続けていくという意思表示をしたんです。

北 矢田さんご自身が建築で核として持たいのは、具体的には「ES house」で「外室」と「内家」という考え方で環

境をある程度囲いながら、自然も感じられる、そういったことでしょうか？

矢田 「建築」に対してというのではなく、僕自身の「生き方」が核になっていきます。僕は独立してはじめて自分が「建築家」という言い方はしていませんでした。なぜかという、僕はこういった生き方をしたいのかという思いを自分の中に持っていて、その生き方が実現できればそれでいいと考えているからです。たまたま建築という道を通して生きているんだということです。

北 それは、具体的にどういうことでしょうか？

矢田 幾つか思っていることがあって、僕は自然の一部だということです。よく「人間と動物」と言うけれど、違うじゃないかと。人間も動物だと思っていて、僕はその一部なんだと。だから、お金を得る、名声を得る、欲望を満たすということ自体に対して、自分の目的はないと考えています。その一方、人間だからこそ努力して学ぶとか、何かを成し遂げることはとても大事なことから、建築を通してやっていきたいという思いはあります。でも、そういうやり方で積み上げていくのが大事で、そこが美しくなければ、全然意味がない。普段の生活も実はそういうのがあって、抑制の利いた生き

方を大切にしていきたい。例えば、僕は可能な限りエスカレーターやエレベーターを使いませんし、よく歩きます。階段で行けるのであれば階段で行く。機械は使えば楽だけれども、その方法は自分を劣化させると僕は思っているのです。そしてそこにどれだけの美しさがあるのかと考えます。

森本 矢田さんの生き方、存在自体が作品でありたいということでしょうか？

矢田 そうですね。「すごい建築家だね」と言われたのではなく、「矢田っていい生き方したね。矢田らしいよね。それはあいつにしかできないね」と言われたんです。それが僕自身の想いであり目標です。

インタビュを終えて

矢田さんの話はとても明快で筋が通っている。それは建築に対してのみに留まらず「純粋な自己」をひしひと感じさせられる。住宅をメインにされているがゆえに、クライアントへ真摯なまなざしを向ける。そしてクライアントもそんな矢田さんの考え方に共感するのであろう。

「帷子の家」の反射光による空間表現でも多様な質感がある。「明るい空間にする」といっても、窓を大きく、白く塗

りましようではないのだ。インタビュ中に矢田さんからピクチャレスクな建築に対して批判的な意見があったが、後から考えると本人の建築も線が揃えられて十分ピクチャレスクである。しかし、それが本質ではなく、そこから生まれる緊張感や気持ちよさがその空気感を表現する一要素なのだと。

建築や自分のあり方について話すことができる人は多いが矢田さんのように言行一致できる人は少ない。インタビュの中で「暫くは建築を頑張ろうと思っている」と言っておられた。現在の事務所ではスタッフ一人とオープンデスクの学生等が黙々と作業に向かっている姿があった。いままで一人でやってきた矢田さんにとっては新しい展開を見出していることが期待される。これからの作品も楽しみであるし、十年後にでもまたじっくり話を聞いてみたいと思った。

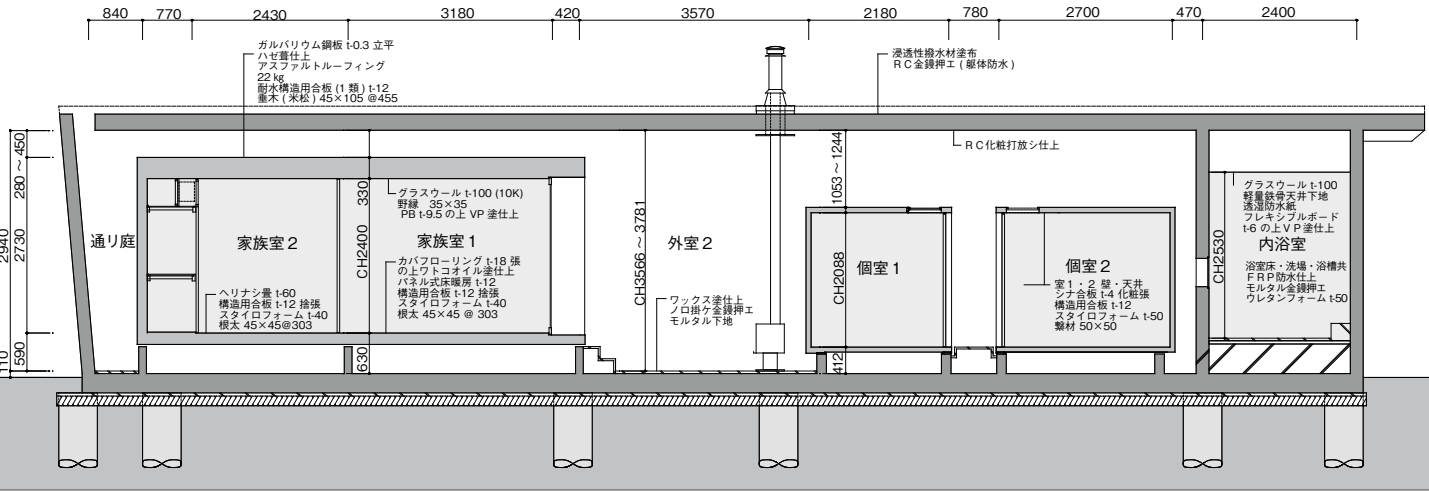


ES house-02

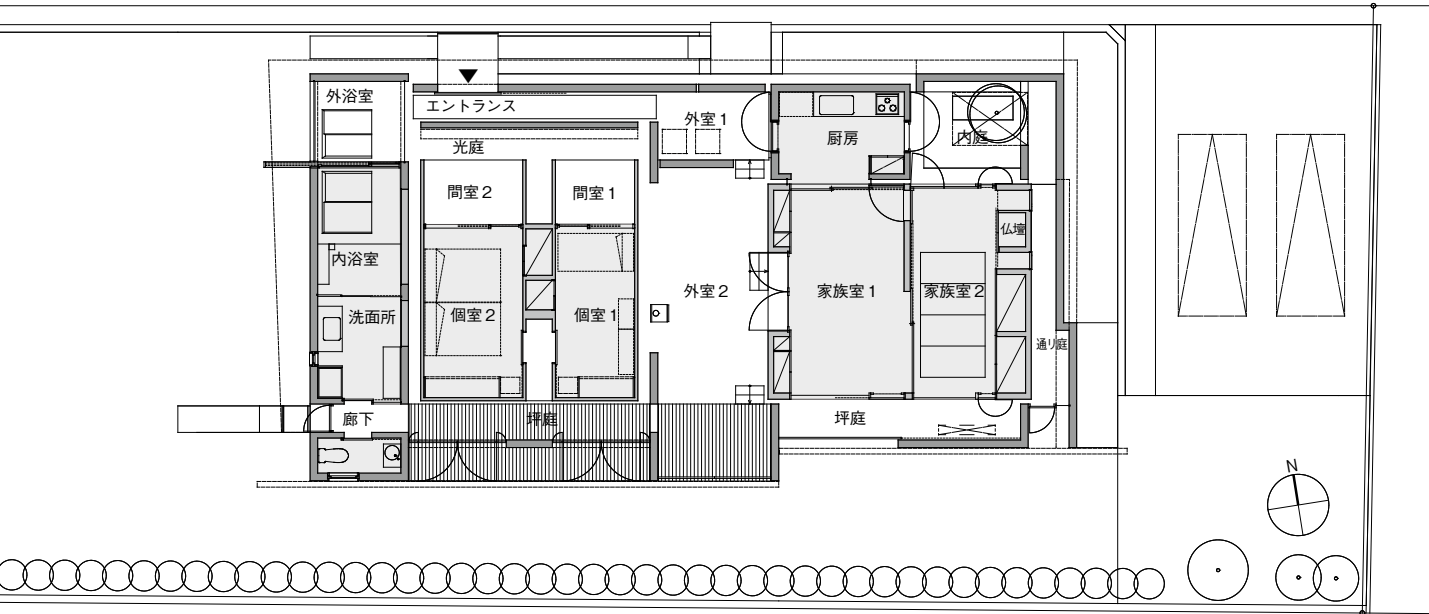


ES house-01

ES house-01



断面図 S=1:120

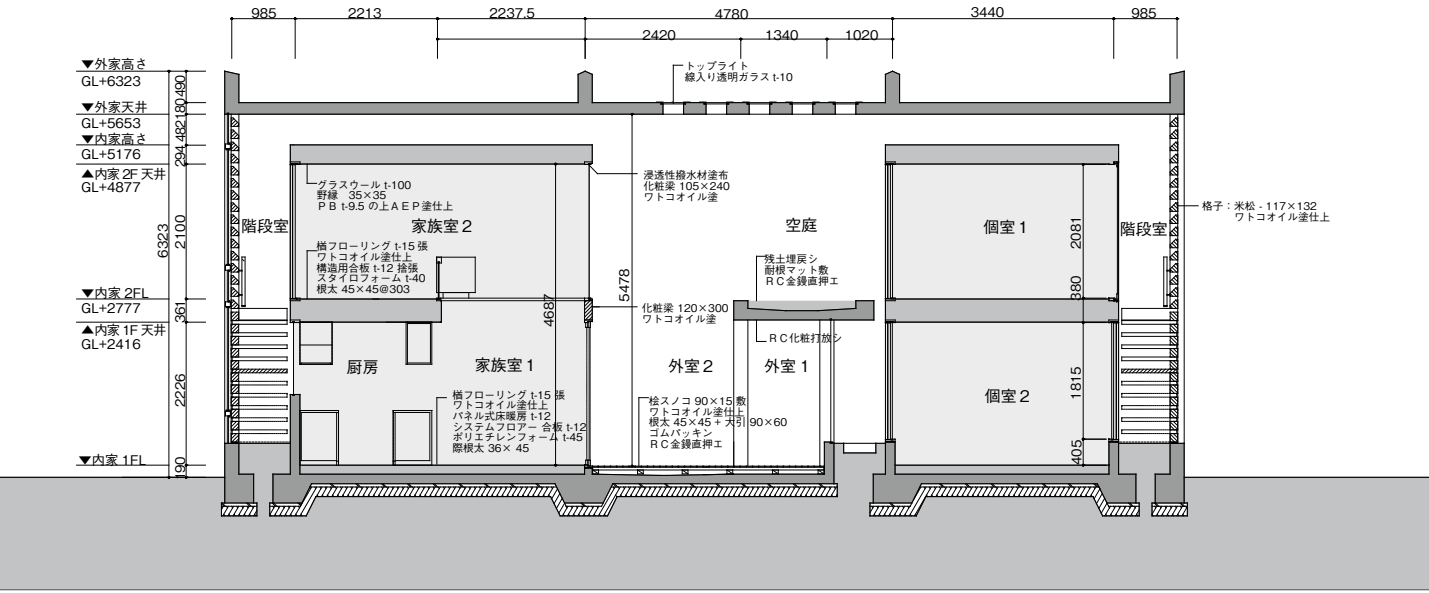


平面図 S=1:200

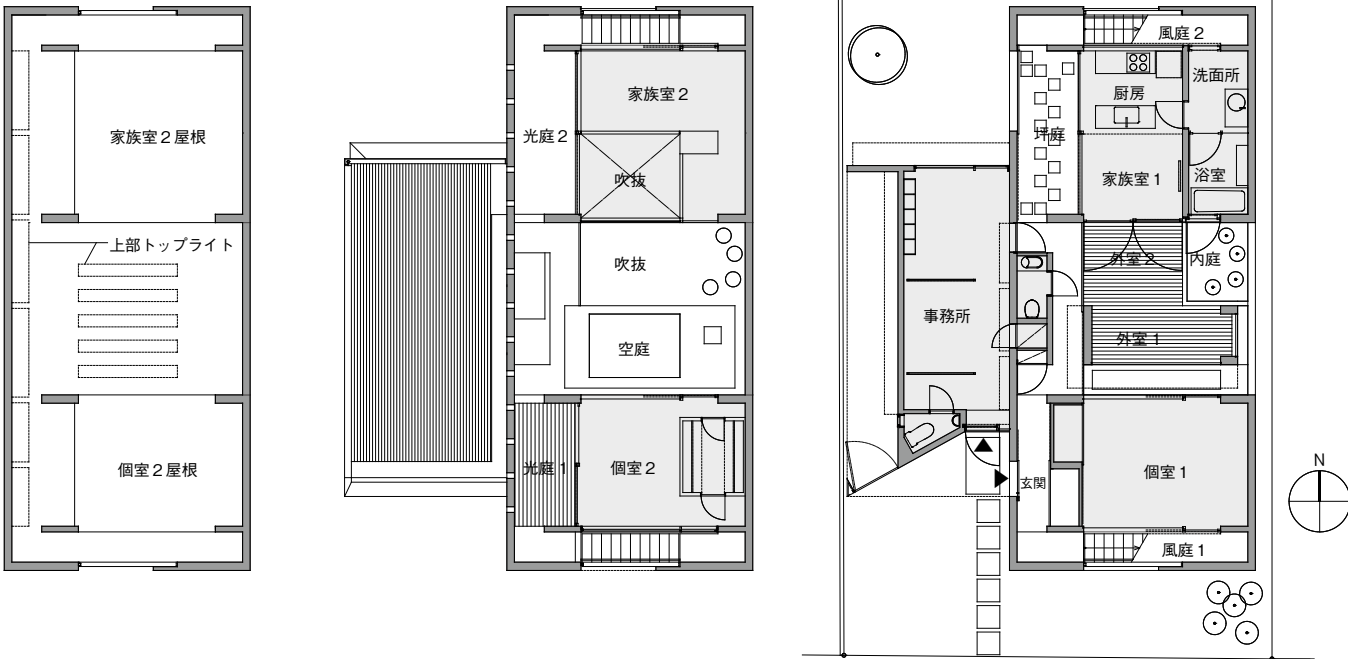


ES house-01
建築地：奈良県磯城郡
家族構成：夫婦2人＋子ども1人
設計：矢田朝士 / ATELIER-ASH
構造設計：工業舎 / 細川悟
施工：出口工務店
竣工：2005年11月
構造規模：RC造＋鉄骨造＋木造
平屋建
敷地面積：900.02㎡
建築面積：174.02㎡
延床面積：164.57㎡
地域地区：市街地調整区域
法22条区域
撮影：絹巻豊(左側)市川かおり(右側)

ES house-02



断面図 S=1:120



内家屋根階平面図

2階平面図

1階平面図 S=1:200



ES house-02
建築地：大阪府大阪市
家族構成：夫婦2人＋子ども1人
設計：矢田朝士 / ATELIER-ASH
構造設計：工業舎 / 細川悟
施工：木村工務店
竣工：2009年12月
構造規模：RC造＋木造 2階建
敷地面積：216.1㎡
建築面積：127.77㎡
延床面積：185.97㎡
(1階/123.82㎡・2階/62.15㎡)
地域地区：第二種中高層住居専用
地域、準防火地域
撮影：絹巻豊(左側)市川かおり(右側)

豊かさとは

私が常に考え、追い求めているものは、本当の豊かさである。先進国などの一部の国は物質的に非常に豊かだと思われ、実際何でも手に入ると言ってもいいくらいだ。衣食住が事足りて、その上生活を便利にするモノや技術に溢れている。都市の造られ方も単純な点や面と線の空間ではなく、人の関わる殆どの部分がネットワークに組み込まれ、高度にシステム化されている。そして至る所を光や熱そして音等の環境を含めて人工的にコントロールされ、不具合や不快な要素はほとんど改善されている。そして建物の性能も年々進化し、技術的にもほぼ完璧に望むままの環境を創り出せるようになっていく。お陰で私たちの日々の暮らしはとても快適である。しかし私が感じるのはこのような環境が「人間的に豊かなのか」ということだ。

人間とは自然の一部であり、その自然は複雑で生命感に満ち溢れたものだ。その自然の姿、草木の芽吹く匂いや、季節の移ろい、様々な表情を見せる自然の営みに魅了され、私たちは自然を生活の中に取り込んできたのではないのだろうか。だから人はいまでも山や川に行き、

緑や動物などに触れ自然を感じたいと思うのだろう。

その自然と関わるのが日常から遠のき、特別な事となるのはとても危ういことだ。人の感性は劣化し、生命力は低下するだろう。いや既にしている。

かつて私たちの身の回りの空間はもっと自由度があり、自然との融合が沢山あったはずなのだ。

しかし日本の社会は過保護であり、また他人の行動をコントロールしたがる。次から次へとお膳立てがなされ、決まり事が増え、少しでもはみ出す事を良しとしない。みんな一緒に、何事もおこらない事を望んでいる。

何もそんなに完璧にしなくても大して不自由ではないし、世の中は回り続けるだろうと私は思うのだけれど…。

私から言わせると不測の事態が無く、思った通りに物事が上手く運び、情感のない社会など生きている面白さがまったくない。

例えば、人の安全は守られた方が良くし、便利なことはいい事である。しかし山の奥地の景勝地の前まで質の高い道路が整備され、フェンスが張り巡らされ、標識に係員と、どこまでやるのだろうか

…。場所そのものの景観や雰囲気、そこに到るまでの気持ちの高揚など、本来求めていることの本质から離れている。簡単にいけないからこそ喜びも大きく、身体感覚を通す事によって理解出来る事もある。

いつからこの大地は人々の手を離れ、人の生きる場所で無くなったのだろうか。

この地球をもう一度、私たちの手に取り戻さなくてはいけない。いまのままでは都市は社会システムの為にあり、その中に私たちは組み込まれ、そこに仕える一つの存在になってしまう。

私は自由に生きる権利が欲しい。安全を求める人や、経済性を追求する人がいるのは当たり前だ。しかし全員を同じ枠にまとめないで欲しい。生き方を選ぶ余地を残して欲しいだけなのだ。

自由とは

私は「籠の中の鳥は鳥ではない」と思っている。鳥は空を飛んでこそ鳥なのだ。籠の中で鳥は既に物体としての存在に成り果てている。では、私にとってはどのような状態が人たり得るのであろうか。それは、心が自由であることだ。心の自

由とは自分自身の価値観をつくり、それに従うことである。心が自由になって初めて己の行動が社会の束縛から逃れる事が出来、その自由が心の力となるのだ。たとえ何もしないにしてもそれが独立した状態となる。

そして私は何時も自由でありたいと考えている。それは個としてのidentityを確立することで、自分の心に正直に生き、失敗しても自分が選択し、納得のいく道を歩めることだ。他人が作り上げた価値観の最高地点を目指すのでは決してない。

但しそれは現代の社会で生きていくには色々と厄介な事でもある。社会の一員として生きていく限り、制度や慣習に縛られ、そして家族や仕事に対する責任もあれば、色々なしがらみもある。そこから少しでも外れ社会的に同じ道を歩まないものは異端者として扱われてしまう。

しかし、私の心に制限を加える権利は誰にもないのだ。また創造するものには心の自由が必要なのである。新しいものを生み出し、人の心を揺さぶるようなものを創る為には自らの心が豊かにならないければならない。

創造とは

ただ私は創造者もまた社会の一員としての責任を持たなければいけないと思っている。時に創造は人や社会に縛られてはいけないという主張がある。確かに正論である。しかし、たとえ芸術であつても他者を傷つけることは許されるべきではない。ましてや建築は純粋な芸術ではないのだ。自前で作られ、特定の範囲内で表現される純粋芸術とは異なり、建築は人のお金を使い、公共の場に晒され、

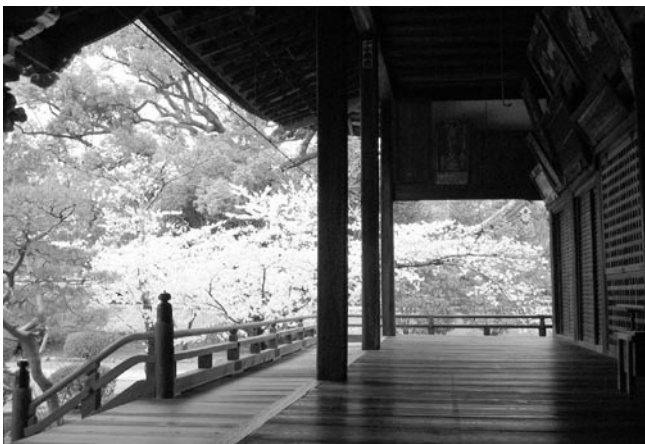
他人に影響を及ぼす存在である。そのような性格を持つ建築が自己満足の為だけで造られる事は施主に対しても、社会に対しても失礼極まりないことだ。

また技術や論理だけを基につくり上げられた建物も心に響かない。たとえ素晴らしい綺麗でも、たとえ完璧な調和が取れ居心地が良くても、心と繋がりがない空間には豊かさを見いだせないし、魅力的に感じることもない。建築とコミュニケーションとは異なるのだ。

私たちの食文化と共に高めあう料亭、精神面で繋がりが力強い支えとなる宗教建築、地域社会での生活に密着した民家や町並み等大切にするものは沢山ある。

その為にも私たちはもう一度、自分たちの文化や立ち居振る舞いを見つめ、生きる上での価値観を問い直す時期に来ているのだろう。

現代社会の偏った価値観だけでなく、多様なものの見方の重要性を再認識し、文明を発展させながらも、連綿と築き上



広隆寺 太子殿



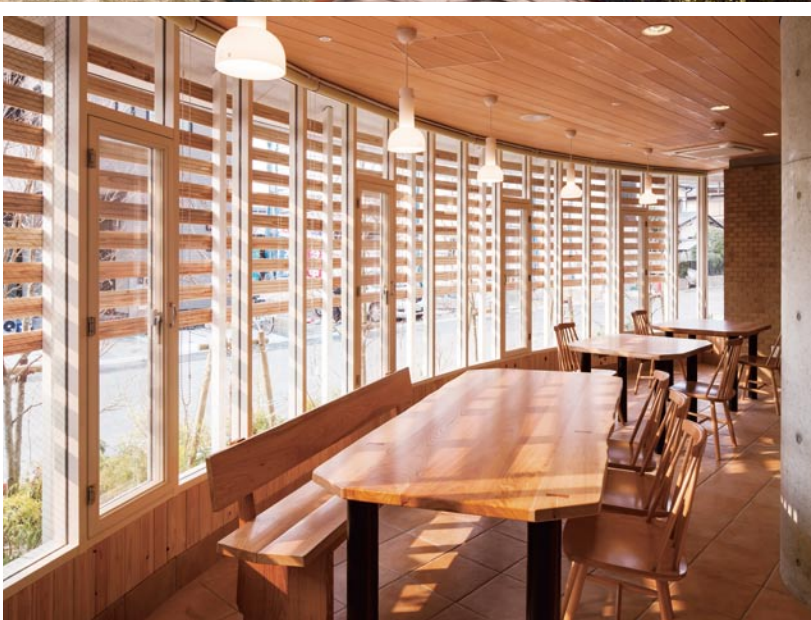
Tuareg in Le Sahara



Bou Noura _ ALGERIA



Tibet



乳児院と幼児院の建替えにあたり、子ども中心の生活空間のあり方を職員とともに模索した結果、0～18歳までの子どもが成長に応じたユニットで生活する形をとった。ユニットは、それぞれ玄関、台所を備えた「家」となるよう計画し、年齢にあったスケールの建具や家具、自然素材を活用した内装等により、安全性と環境に配慮している。ユニットに分かれた少人数の暮らしは、落ち着いた環境を提供するが、他ユニットとの関わりが少なくなるため、全体のコミュニケーションの場として、交流ホールと園庭を設けている。園庭は井戸水を利用した水場、小さな畑や砂場を設け、子どもが自然に親しむ場とした。

建 築 主：社会福祉法人
和泉乳児院
所 在 地：大阪府泉大津市
用 途：児童福祉施設
等(乳児院、児
童養護施設)
竣 工：2012.3
構造規模：RC造4階建
敷地面積：1,938.72㎡
建築面積：1,050.39㎡
延床面積：2,777.69㎡
写 真：松村芳治



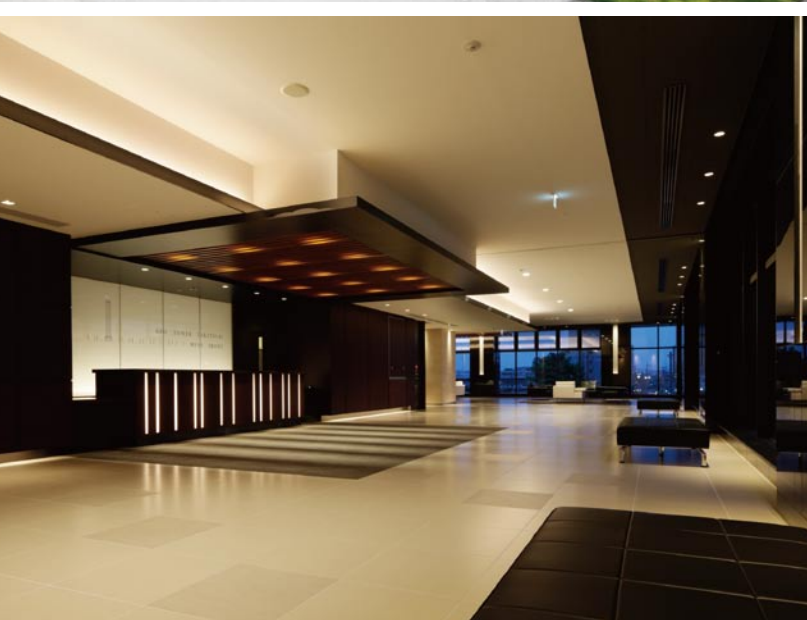
耐震化のための建て替えにあたり、安全で快適な建物構造に加え、「子どもたちの普通の生活の場」かつ「入所児童の変化等に柔軟に対応できる建物」を目指して、施設関係者との打ち合わせを重ね、緩やかなユニット形式の居住空間と、それを支援する交流空間を併せ持った建物が完成した。子どもたちの生活空間を6つのグループに分け、それぞれリビング・洗面・トイレを設けて生活単位の小規模化を図り、フロア毎の食堂・浴室で複数のグループが交流する段階的なつくりとした。1階には、全員が集える多目的室、和太鼓等の療育活動をすすめる訓練室（防音室）、自活訓練室を備え、地域との交流も盛んに行われている。

建 築 主：社会福祉法人
大阪福祉事業
財団
所 在 地：大阪府大阪市
用 途：知的障害児施設
竣 工：2012.3
構造規模：RC造3階建
敷地面積：2,637.68㎡
建築面積：1,095.99㎡
延床面積：2,373.72㎡
写 真：松村芳治



健康を創出する製薬会社のオフィスとして「健康な未来のオフィス」をテーマに、使う人が健康になる空間、地球環境に対しても健康な建築を目指した。建物中央に上広がりの吹抜を配することで、地下1階まで届く自然採光や自然対流と外気の併用によるハイブリッド空調、太陽光発電の採用など、積極的に自然エネルギーを活用している。吹抜には立体的な緑化とミスト噴霧装置により、空気質の向上とどのフロアからも緑を眺められるように配慮した。吹抜の回遊動線に木漏れ日のような開放的な階段を配置し、利用率を高めることで、社員の健康増進やリフレッシュに役立てている。

建 築 主：大正製薬株式会社
所 在 地：大阪府豊中市
用 途：事務所
竣 工：2012.7
構造規模：S + SRC 造
敷地面積：2,535㎡
建築面積：1,268㎡
延床面積：11,966㎡
写 真：古川泰造



JR 高槻駅前に計画された総面積約 9.3 ヘクタールに及ぶ再開発事業区の一街区に位置するタワー型集合住宅。北摂の山並みを背景に直線で構成されるシンプルなフォルムを配置し、再開発事業区のランドマークとしての姿を浮かび上がらせる事を意図した。「住宅・学校・医療・商業の各施設を有機的に連結させ、心地よい緑でつつむ事で、上質で多様な生活文化が育まれる「次代の暮らしのミュージアム」のような街を目指す」という街区の開発コンセプトにふさわしい住空間の創造を目指し、自然環境と調和した「みどりの丘」の上に建つ優美なタワーレジデンスをイメージした。

建 築 主：
阪急不動産株式会社
新星不動産株式会社
エヌティティ都市開発株式会社
所 在 地：大阪府高槻市
用 途：集合住宅・店舗
竣 工：2012.6
構造規模：RC造一部S造
敷地面積：7,994㎡
建築面積：4,367㎡
延床面積：62,598㎡
写 真：SS大塚(内山雅人)



「特養ホーム待機何百人」という言葉に象徴されるように介護を必要とする人たちにとって「一定程度の負担で入居できる快適な住まい」の提供は遅れをとっている。本計画はこの社会的課題に挑戦している法人の企画・運営によるもので、敷地・経済条件他様々な制約の中でもこの理念の具現化を目指した有料老人ホーム（住宅型・58室）である。温泉の楽しめる大浴室、認知症の方への入居対応、懐かしさから元気をつくる「回想スペース」の設置他、ソフト・ハードの仕掛けを満載したコンパクトプランの施設である。本格的な高齢者施設が今までなかった当地区での「地域ケア拠点」として定着していくことが期待されている。

建 築 主：株式会社
オール・ツー・エス
所 在 地：京都府宇治市
用 途：有料老人ホーム
竣 工：2012.7
構造規模：RC造
敷地面積：1,115.42㎡
建築面積：668.72㎡
延床面積：1,965.64㎡
写 真：松村芳治



既存キャンパスに散在していた大学院臨床心理学研究室、発達臨床心理学研究所、音楽療法室等の心理教育相談施設を1つの建物に集約し、教育と研究および地域住民との実践活動のさらなる発展を目指して計画された国内最大級の施設である。高いプライバシー性の必要な低層部と、学舎としての快適な環境が求められる高層部のファサードを、子供たちの健やかな心の成長を象徴する樹木の形にまとめ上げ、既存キャンパスの伝統との調和と未来への発展を表現した。また、中庭や屋上庭園、ラウンジといった施設を適所に計画し、来談者や教員・学生が心安らぎ心開けるような空間づくりを目指した。

建 築 主：学校法人
武庫川学院
所 在 地：兵庫県西宮市
用 途：学校
竣 工：2011.12
構造規模：RC造
敷地面積：1,384.33㎡
建築面積：852.80㎡
延床面積：3,434.69㎡
写 真：SS 大阪



楡の木テラスは賃貸住宅です。「向こう三軒両隣」のよさを見直し、ゆるやかな近所づきあいが生まれる関係をつくりたいと考え6軒の長屋にしました。職住一体ができる3軒を道路側にずらして配置し、全ての住戸に室内とつながる専用庭をつくり、そこに隣戸専有の軒下空間をあえて対面させています。専有のテラスとポーチが交互に連続する軒下空間は長屋の「路地」にあたり屋外の日常生活のなかで隣人と顔を合やす機会が多くなるようにしています。視覚的に共有した屋外空間のゆるやかな境界での挨拶から始まる近所づきあいが、共に住む意識を高めひとつのコミュニティとなり豊かな街の形成につながることを期待しています。

所在地：大阪府四條畷市
用途：長屋
竣工：2012.2
構造規模：木造2階建
敷地面積：431.93㎡
建築面積：217.38㎡
延床面積：426.72㎡

病院建築にこそ、建築家・山田守（一九四〇～一九六六年）の手がけた建築の中で、現代へ引き継ぐべき大切な何かがあるのではない。今年の五月末に、「社会保険横浜中央病院」（一九六〇年）を久方ぶりに訪ねてみて、そう確信した。建っているのは、横浜のJR根岸線関内駅から徒歩八分程の場所で、後方には中華街が隣接し、その先には横浜港と山下公園が広がる町の中心に位置する。竣工から半世紀以上が経過し、十数年ぶりなので、この都市激変の時代に飲み込まれてしまったのかも知れない、と危惧していたのだが、ていねいなメンテナンスを施された清潔なたたずまいは変わらずにそこにあった。

分離派建築会のメンバーとして戦前から活躍した山田は、一九六四年の東京オリンピックの柔道競技場として建てられた「日本武道館」や、同じ年に開通した東海道新幹線のゼロ系と呼ばれた車体の色に合わせたクリーム色が塗られた「京都タワー」であまりにも有名だ。しかし、そうした時代を象徴する晩年の個性的な建築に隠れて、また、そのほとんどが姿を消してしまっただけに、今では意識されることは少ないものの、山田がライフワークとして精力を注いだのが、病院建築だった。二〇〇六年に開催された展覧会「建築家山田守展」流動するフォルムにみた合理性」に合わせて出版された『建築家山田守作品集』（東海大学出版会二〇〇六年）によれば、山田が手がけた病院建築は二六件にのぼる。その中には、通信省時代の「東京通信病院」（一九三七年通信協会賞）や「大阪通信病院」（一九三八年）、戦後の独立後に手がけた「東京厚生年金病院」（一九五三年・文部大臣賞）や「大阪厚生年金病院」（一九五四年・日本建築学会賞）など、病院建築に大きな潮流を築いた名作も含まれる。しかし、残念なが

ら、そのすべてが現存しない。こうして、気がつけば、山田の病院建築は、DOCOMOMO Japanが日本を代表する近代建築〇〇選に選んだ「熊本通信病院増築」（一九五八年・現・NTT西日本九州病院）など、数件しか残っていないのである。

そんな中であつて、この「社会保険横浜中央病院」は、病院建築に託した山田の建築思想を伝える貴重な意味を持ち始めている。訪れると、白く輝くモザイクタイルで覆われた軽快でモダンな外観と、朝顔型の優雅でユー

記憶の建築 松隈 洋

社会保険横浜中央病院 1960年
ホスピタリティの原風景



前面道路から見る建物全景



優雅な曲線を描く朝顔型の玄関ポーチ

この病院が竣工する数年前の一九五五年、山田は、自らが手がけてきた病院建築を振り返った文章の中で、次のように記していた。「われわれはいわゆる合理主義を尊重し、それを基調として精進して来たものであるが、今日では単にいわゆる合理主義的な段階に止めることは、進化し流動しつつある新建築の潮流に逆らうことにさえるであろう。われわれは合理主義の段階を一段とたかめなければならぬ。あまりにも理に偏し、あま

りにも現実的な経済にのみ偏した、いわゆる合理主義を棄揚すべきである」（『建築文化』一九五五年七月号）

また、その翌年に書かれた文章には、次のような言葉がある。

「直線直角によつて形成されたゴチゴチしたFormと、そしてそれに呼応する白黒という単純なる色調は原始的合理主義の遺物であつて各国に簇出する自動車飛行機の形態がそ

の間に躍進せる新機能に適応せる、より高級な自由な線と面による形と高度の色調を以て出現しつつある。建築の機能も又それ等の進歩発展に伴つて進展しつつある。かくて建築形態のみが原始的合理主義的形状に取り遺されていることは許されるべきことでない。（中略）又われわれの都会生活者の眼はその心と共に動きつゝあり座視静観の茶室時代から流動視覚をもつて感賞する流動美へと発展しつつある。都市形態、建築形態もまた流動的美を表現することを求められつつあるようである。」（『新建築』一九五六年五月号）

急激な近代化の下で合理主義が隘路に陥つてしまった状況を受けて、山田が自動車や飛行機の造形を手がかりにそれを乗り越える方法を模索していたことがうかがえる。そして、別の文章には、次のような言葉も記されている。

「美しい自然と豊かな四季の変化のうちに育った日本人の感覚ないしは芸術の特性の一つは、「柔かさ」である。形体の四角張った角を丸め、或は直線・平面に曲線曲面を加味してできた「柔かさ」を以て慰むることも望ましいと思う。」（『国際建築』一九五四年九月号）

こうして、病院建築に注いだ山田のデザイン思想が見えてくる。それは、病院「ホスピタル（hospital）」と「言葉の原義にあるホスピタリティ（hospitality）」すなわち、温かく人を迎え入れる、空間にこそ最も良い形で結実したのではないだろうか。巨大化し能率化を加速させている病院建築の現在と未来を考へる大切なヒントがそこにあると思う。

松隈 洋

京都工芸繊維大学教授、博士（工学）。一九五七年兵庫県生まれ。一九八〇年京都大学卒業後、前川國男建築設計事務所に入所。二〇〇八年十月より現職。



「Live Natural Premium」は、気づくと無意識に撫で、そしてその場に深く腰を下ろしたくなる床素材だ。

私が以前聞いた話で恐縮だが、ドラマのセットで裕福さを演出する場合、床になるべく物を置かず、床面をスッキリとさせる。一方貧しさを演出する場合、床面を物で溢れさせればよいとのこと。この話から、豊かな空間の実現には床面のデザインが大切で、中でもデザインの地となる床材には特に気を配るべきだという原則を導き出せるのではないだろうか。そんな原則に込められる優れた素材が「Live Natural Premium」だ。

従来の合板フロアの常識を覆した「Live Natural」

今回の取材に際して、大阪・本町の朝日ウッドテックの大阪ショールームを訪ねた。ショールームに入ると早速、木の素材感を湛えた美しいフローリングが迎えてくれた。ブラックチェリー、ハードメイプル、ブラックウォルナットといったさまざまな樹種が大きな面積で張り分けられている。樹種による空間の違いを感じてほしいという意図がはつきりと読み取れる。同行者にそのことを伝えたと、彼は言いにくそうに、これは従来からの商品で今回の取材の対象ではないと言う。今回の取材対象は、無垢材の持つ素材感にさらに迫るため2mmの厚みを持つ挽き板を表面材に用いた「Live Natural Premium」である。私が見たのは、十年前の二〇〇二年に天然木の本質美を追求すべく商品化された「Live Natural」であった。

「Live Natural」の美しさなら「Live

評価を受けてきた。「Live Natural Premium」では、さらに無垢の風合いと感触を活かすべく「ナチュラルマット塗装」を施している。

「Live Natural Premium」は、朝日ウッドテックが長年かけて培ってきた複合技術や加工技術により、無垢材特有の多くの壁を取り払った二つの結論だと言える。

木の文化を伝える担い手としての企業活動
 としても一つ、無垢材だから美しいとは必ずしも言えないだろう。良質な木材を選ぶ確かな目、厳選された木材、木目や色目（濃淡）のバランスのよい配置を通してはじめて美しいフロアが生まれる。このため突き板・挽き板とも、一尺×六尺のフロア一枚は数枚の木片を組み合わせることで成り立っている。その組み合わせの工程を「木組み」と呼ぶが、ここにも朝日ウッドテックの独自性がある。「木組み」は、フロアの最終的な意匠そのもので、高い技術とセンスが求められる。同社では熟練の技能工が手作業で一つずつ行っている。工場のラインや機器も人の力が最大限発揮されるように独自の開発を積み重ねている。だからこそ「Live Natural Premium」は生まれたのだ。

同社では、木が生長する過程で生じた節・パークポケット・白太等を欠点ではなく、木が生きて来た証しとして、木それぞれが持つキャラクターとして捉えている。このことから、木本来の素材感がより豊かに表現できると共に、木が生きて来た長い年月をも感じることができる。木を単なる建材として扱うのではなく、銘木商としての出自を活かした朝日ウッドテックの面目躍如となるエピソードだと思う。

日本人は木に恵まれ、木と親しく寄り添うことを通して文化にまで高めてきた民族だ。ここ数十年の日本人は便利で扱いやすいものに囲まれながら生きてきたと思う。更に便利なものに取って変わられるといった繰り返しであっ

プランナーと呼ばれるまでになった。しかし、一九八〇年代から二十年ほど、市場では住宅の建具類と床を同色でコーディネートするカラーフロアが流行した。

その流れに対応するうちにカラーは二〇〇〇色にものぼり、マンションに至っては物件ごとに違う色のフローリングを作る羽目になった。その流れに違和感を抱き、自問自答の末に辿り着いたのが原点回帰であり、「本物の木の良さを知って欲しい」という想いだっ

た。そんな「木を愛する」社員達が、カラーフロア全盛で画一的なトータルカラーコーディネートの時流の中、社運をかけて開発したのが「Live Natural」である。発売当初は割

ルムの奥へと歩を進めた。結論を言えば、「Live Natural」とは明らかに違った。違いを正確に表現することは難しいが、例えばハードメイプルは奥行感を湛えた揺らぎのある輝きとでも言うのだろうか、厚みを持つ素材でありながらも透明感さえ感じられる。その他の樹種も、豊かな木目を持ったオーク、深い濃淡を持つブラックウォルナット、現在の美しさもさることながら、経年変化が楽しみなブラックチェリーなど、それぞれの木が持つ良さ、魅力が十二分に引き出されている。

ではなぜ、「無垢を超える」との枕言葉がつくのか、無垢フローリングでは不可能なのだろうか？木の本質美を表現しようとするれば無垢材と考えがちだが、そこには超えなければならぬ多くの壁が存在する。そもそも希少種の高品質材は入手自体が困難である。そして、天然木ゆえの反り・割れ・伸縮による隙間の発生とともに、よく挙げられるのが短冊（巾狭）形状による施工の煩わしさ及びコスト高だ。これについては従来通りの標準サイズ（一尺×六尺）を採用し、板どうしのジョイントもほとんど気づかないレベルに仕上がっている。

さらに床暖房への対応となると、使用時の含水率の変動により1mあたり10mm縮むことになる。「Live Natural Premium」は、床暖房使用時でも伸縮率を無垢フローリングの約十分の一、つまり1mあたり1mm程度に抑えられている。また、木は柰の方向によつて伸縮率が異なり、板目の方が柁目に比べて二倍ほど伸縮しやすい。そのため無垢フローリングで床暖房対応を謳っている商品は、必然的に柁目が多く巾の狭いものとなってしまう。「Live Natural Premium」は、広巾の板目が持つ本来の大きさや存分に楽しむことができるものだ。

仕上げ塗装についてもこだわりを見せている。「Live Natural」で採用されたビブアヘッド塗装は、木味を活かしながらも耐傷性に富むもので高い



色差計を用い板子1本1本の色を測定する



目で材色や板目、柁目のバランスを取る



スライサーで切削された突き板

た。日本人の生き方自体が大きく変わろうとしている今求められているのは、足るを知りいつまでも愛情の持てるものだけを身の回りに配するシンプルな生き方ではないだろうか。

シンプルで居心地のよい空間には、時の経過を受け止め、受け継ぎ楽しんでいける「Live Natural Premium」こそ相応しいものではないだろうか。

朝日ウッドテックの前身である銘木商「霜寅商店」は、一九一三年に大阪で創業。床柱や欄間などに使われる希少価値の高い高価な銘木を扱っていた。大きな転機となったのは、六〇年前の一九五二年の「朝日特殊合板」の設立であった。「希少で価値ある銘木を世に広めたい」との思いが発端点であった。世の中に印刷紙を利用した化粧合板が普及していく中、天然木に代わって銘木化粧合板の製造を手がけた。突板貼りフローリングやマンション用の防音床材、床暖房対応床材など業界初となる商品も数多く開発し、業界のトッ

ボランティアから仕事へつながるまちづくり

岡田 圭司

まちづくりについて

私は京都市役所で働く地方公務員で、京都市の景観行政に携わっています。その中で「景観」をテーマにしたまちづくりについて、地域の人々と一緒になって考えています。

また、京都府建築士会に所属し、青年部会で「空き家」の流通促進の取り組みにも関わっています。

ここで言うまちづくりとは、「多様な価値観がある中で、共通の目標や将来像などに向かって、地域住民が主体となつて取り組む活動」と考えています。老若男女を問わず、自分の住むまちでみんなが豊かで快適な生活が送れるよう、建築士としての職能を最大限に発揮すべく、具体的な方法を模索しています。

まちづくりについて考えるに際して、様々な職能を持った人々が集まり、活動することが必要であり、その職能の中に「建築士」は不可欠であると考えています。

建築士として関わるまちづくり

私は建築士という職能を有しながら、行政と職能団体（建築士会）という立場で別々のまちづくりに関わっています。ここで簡単にその内容を紹介します。

まずは職業として関わるまちづくりに

見を頂きながら、自分なりの考えを整理してきました。そのいくつか紹介したいと思います。

まず、建築士個人としてまちづくりに関わる場合、自身が住む、或いは事務所を構える地域で活動するのが良いと思います。このように地域の一員として関わる場合、自身が所属するコミュニティに密接に関わることができ、自然に信頼関係を築くことができるので、地道に続ければ将来的には仕事に繋がる可能性もあるでしょう。当たり前のことですが、これを継続的に実践するのは容易なことではないと思います。

一方、建築士会のような職能団体の一員として活動する場合、自分たちの自己研鑽を行う実践フィールドとして、貴重な経験を積むことができます。自身のスキルアップのためであると考えれば、授業料を払わないといけないところを、払う必要がない上に経験が積めると考えると、ボランティア活動にも大きな意義を見出せるはずです。

ただしこの場合は、組織として信頼関係を築くことになり、個人プレーは控えたほうがいいでしょう。その代わり、個人としては得られない、協働作業の実現による、より大きな可能性が拡がっているように思います。

いずれにせよ、まちづくりに積極的に関わる姿勢ができれば、仕事につなげていくことは可能だと思います。職業としてまちづくりに関わるとなると、自ら企画し、地域へ積極的に提案し続けることが必要です。「自らの意志で積極的に関わる」ことが活動の継続に繋がり、さら

ついて。

住民が主体となつて、地域の特性を活かした景観の保全・創出を考えながら活動する組織「地域景観づくり協議会」に対し、行政が認定する制度を活用してもらえるよう働きかけを行いながら、地域の人々と協働してまちづくりに取り組んでいます。

現在、京都市内の八つの地域の方々と取組を進めています。一例として、京都の中心部、烏丸五条周辺の修徳学区では、歴史資源を大切にしながら、地域にふさわしい建物のデザインを研究するなどの取組を行っています。また、四条河原町に近い先斗町では、お茶屋が軒を連ねる町並み風情にそぐわない看板や客引きなどに關して自ら規制をし、地域のルール（町式目）を定める取組が行われており、地域特有の課題に対処すべく活動しています。

私が行政の立場からまちづくりに関わるに当たり、常に心掛けていることがあります。特定の地域だけの利益になることを考えるのではなく、その地域の「景観」が良くなることにより、その価値や魅力が上がるとともに、その価値が隣接する地域へと波及し、引いては京都市全体の価値や魅力の向上につながることです。

には仕事への第一歩を踏み込むことにならうと信じています。

行政にできること

まちづくりに取り組む中で複数の地域に関わっていますが、それぞれ目標や考え方は大きく異なります。百のまちづくりがあれば、百通りの方法があります。「まちづくりは、生き物である」と言われるように、型にはまったものなどはなく、すべて手づくりです。そんな多様性を踏まえた上で、行政として何ができるかを試行錯誤しています。

京都市では具体的に、下図に示すようなネットワークを構築しながら、まちづくりを進めたいと考えており、多くの人がそれぞれの立場で、職能を活かすことができるような環境をつくり出すことを試んでいます。

市民の主體的な取組は欠かせないのですが、事業者と行政の協働がなければまちづくりはうまくいかないと思っています。しかしながら、この三者は、対立関係になることもあり、そのクッション役としてボランティア活動にも積極的に関わろうとするNPOや建築士会、学識者などの存在が必要になってくると思っています。事業者を除く関係者は、協働関係になりやすいのですが、事業者との協働がなかなか難しいと感じています。事業者と言っても、幅が広く、様々な事業者が含まれますので、ここで具体例を挙げたいと思います。

マンションを建設するときに地域のまちづくりと、どのように関わるのか。一般的には、中高層に関連する条例等の近

しかしながら、このような取組に関わる際には、建築士の職能を最大限に発揮しているとは言えないのが実情です。行政担当者として関わっていますので、地域の方からは、防犯や防災、福祉、コミュニティ、環境など様々な政策分野に関することを尋ねられることがあり、建築のことを聞かれることはほとんどありません。

次に建築の職能団体である建築士会として関わるまちづくりについて。

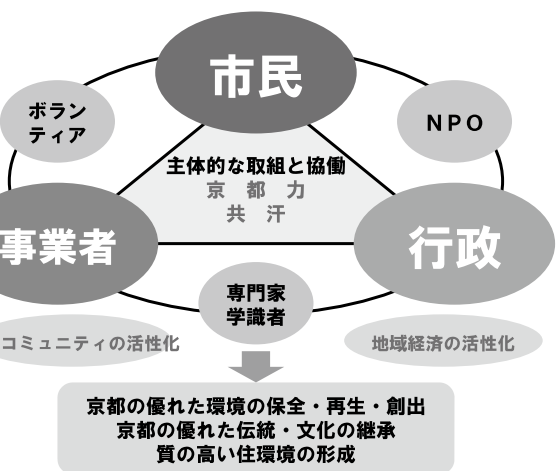
空き家率が二〇%を超えている京都市東山区にて「地域連携型空き家流通促進事業」に関わっています。本事業は、地域の自治組織等が、地域を支援する学識経験者や不動産事業者等専門家と連携して、地域のまちづくり活動の一環として行われています。より具体的に言うと、放置されたままになっている空き家の確認などを行いながら、地域の魅力や正しい方のルールを発信するとともに、地域のニーズに応える空き家の活用方法を、空き家所有者に提案することで、空き家の流通促進を図ろうというもので、設計及び施工に携わっている者とチームを組んで関わっています。

建築士という職能を活かして空き家に取り組むとなれば、適正な維持管理の方法の説明や、改修工事の設計や施工の

隣説明会や工事着手前の工事説明会などで、地域との関係をつくることになると思います。地域住民は様々な要望をし、事業者は事業採算を踏まえ、法律等に基づき、必要な手続等を行います。もうこの時点で、協働ではなく、対立の関係になりがちです。

そうではなく、マンション建設の計画段階あるいは構想段階から、地域と連携し、問題などを共有しながら、建築士がマンション設計・建設を進めていくには、もちろん時間も手間もかかります。事業者だけではなく、地域住民もしっかりと体制を組んで取り組まなければできないことですが、このような体制づくりが実現できれば、当初からまちづくりに関わりながら、設計等ができるのではないのでしょうか。

このような環境を作り出すことが行政のできることで、しなければならぬことだと考えていますが、こうした環境を作り出すポイントには、事業者よりも地域住民にあると思っています。



ドバイスをするなどを考えていました。予想に反して空き家の活用方法や改修費用などを尋ねられることがありました。そんな時、建築士会としてはあからさまな営業活動を行うことは難しいので、お茶を濁したような返答しかできず、職能団体としての活動に限界を感じていました。「建築」に携わりながら、地域のまちづくりに参加することについて、改めて考えさせられます。

ボランティアから仕事へ

行政に携わる者としてまちづくりに関わっていると、もしかすると、まちづくりに関わるのが「職業」になるのは、行政担当者だけなのでは、と思うことがあります。それほど、建築士の職能を最大限発揮し、対価をもらってまちづくりに関わるのは難しいように感じています。その点、行政という枠組みで職業として取り組めていること自体、恵まれているのかもしれない。

建築士会で仲間の建築士とともにボランティア活動をしなが強く思うのは、何とかして建築士としての職能を活かして仕事に繋がらないだろうかということです。

今まで行政担当者、建築士会の一員として、たくさんの人と出会い、様々な意

P27 右 空き家の実態を把握するためのまち歩きを実施
左 まちづくりのネットワーク図

大阪府建築士会活動報告 岡本森廣会長インタビュー 社会に必要とされる建築士の団体を目指す

はじめに

大阪府建築士会活動報告とは

多くの会員の方々にとって、大阪府建築士会がどういった組織で、どのような活動をしているのか、何となくわかっていくけど、実際には誰が何を目的として、具体的にどのような活動がおこなわれているのか、その全貌を理解している方はあまり多くはないのではないだろうか。

そういった今更と思える内容を『大阪府建築士会活動報告』と題して、ひとつひとつシンブルかつ丁寧に紐解いていこうというのが、この企画記事の目的です。

堅苦しく、形式張った内容で説明するのではなく、会報誌「建築人」の名が示す通り「人」ありきで、具体的な内容と普段着レベルの感覚でお伝えしていきたいと思います。

まずは『大阪府建築士会活動報告』の第一回として、岡本会長にお話をお聞きました。

● ● ●

会長つて：どんな人

『どんな少年時代だったのですか』

「少年の頃は、やんちゃというより、おとなしかったと思います。勉強は好きでした。今も、これからも、生涯勉強だ

と思っています。親の言うとおりに生きるの嫌いなタイプでしたから、高等学校の電気科に進みました（笑）。目に見えないものを相手にするのが好きでしたから。僕らの年代は、勉強のできる先輩の多くが工業高校の方に行きました。」

『電気科に進んだのに、建築に変わられたのは何故ですか？』

「いつの頃からか、建築の方が面白いと思い始めました。都会で勉強しようと思って大阪工業大学短期大学の建築科に入学しました。叔父が東大で教えていて東京に来いと言われたけど、人の言うとおりに生きるの嫌いなのと、東京は肌に合わないと思って、大阪に来ました。それ以来、大阪に居ます。」

岡本森廣会長は、一九四九年、鹿児島県薩摩川内市に生まれ。祖父が西郷南洲（隆盛）に仕えておられた家に長男として生まれた薩摩隼人。大阪工業大学短期大学の建築科を卒業し、一九七三年に全日本コンサルタント株式会社に入社。主に鉄道建築に従事しながら、現在も多くの公共建築の設計・監理に携わられている。

大阪府建築士会においては、青年委員長、評議員、様々な担当理事、委員長を

がら『今すぐできること』、『将来への種を蒔くこと』、『旧きから新しきへ継承していくこと』という三本の糸を丁寧に紡いでいくようにしている。

今回、話題となりながら具体的に誌面で紹介できなかった建築士会の抱える課題と対策については、連合会会報誌「建築士」七月号から九月号のオピニオンに岡本会長自ら、より厳しい意見を、提言として具体的に書かれてる。是非一度、そちらをご一読頂きたい。

最後に『具体的にどう進めていくのか』を聞いてみた

「私ひとりではどうにもならない。そのため、新しく組織し直した委員会とそのメンバーで具体的ににあたっていかなければならないと考えています。特に委員長には、国政で例えて言えば、政権を担う閣僚と同じ立ち位置に居ると自覚して、自ら積極的な活動を期待しています。」

● ● ●

ということ、次回から、各委員長に会長の期待に対してどう考え、どう活動していこうとしているのかをお聞きしていく予定です。お楽しみに。

本企画に対するご意見・ご要望をお寄せください。
また、編集部では積極的な士会活動報告と、編集部と一っしょに記事を作成していただけるインタビューを募集しています。

ご連絡は下記まで
info@aba-osakafu.or.jp

インタビュー
曾我部 千鶴美
西田 多美子
筑波 幸一郎（責任編集人）

経て、八年間、副会長職を務めた後、今年度より第七代会長に就任された。

鹿児島県出身の男性の気質をあらわす言葉に薩摩隼人というのがある。辞書によれば『利害を省みない潔さと、勇猛果敢さを兼ね備え、質実剛健を旨とする。反面「ぼっけもん」といわれる言葉に象徴されるように、一本気で融通が利かないともいわれる。理屈を言わず即実行に移す行動力のある人が多い。』と記載されている。岡本会長のお話をお聞きして、その端々に薩摩隼人らしい人となりを感じる事が多かった。

そんな岡本会長に、大阪府建築士会の会長としてどのようなことを考え、何を目指しているのかをお聞きました。

『会長になられて大きく変わったことはありますか』

「大阪府建築士会は今年で六十周年を迎えました。その節目に会長に就任しておよそ半年、副会長時代には気づかなかったこと、驚くことがいっぱいありました。そのひとつには、大阪府建築士会の会長として発言したことが、社会に与える影響が想像以上に大きいということでした。」

とある事件について、新聞各紙からイ

ンタビューを受けた際、その新聞記事の内容に対して様々な反響があったことをエピソードとして語る岡本会長。
そのようないくつかの体験を経て、あらためて、大阪府建築士会の代表である会長として、自らを律し社会と向き合う組織をつくらなければならないと決意されたという。

『具体的にはどのような組織づくりを目指しておられるのですか』

「今までは自分たちのための団体だった。これからは社会に必要とされる建築士の団体へ転換していかなければならない。そのためには自分自身を含めて、大きく変わらなければならない。」

そのための変化に伴う組織づくりは大きな反発が予想される。それは直面している課題があまりにも多岐にわたり、多くの意見や批判を招くからだ。

不足する財政、減少する会員、事務局を含めた組織のスリム化など、差し迫って重要で解決していかなければならない課題は、大阪府建築士会のみならず、今の社会が抱えている問題に等しい。

それでも「変わらざるを得ない」と岡本会長は強く語る。

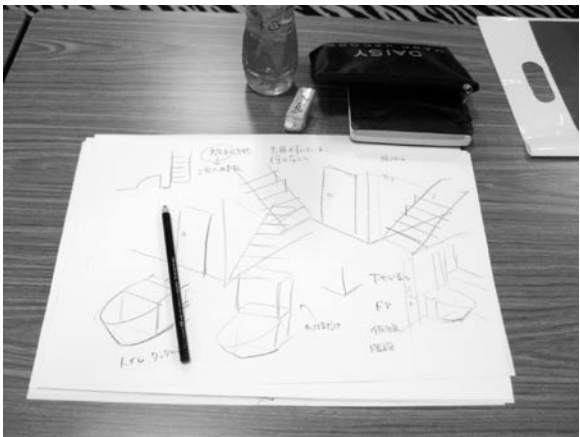
近建青（近畿建築士会協議会青年部会）ホームページ刷新のお知らせ

十月より、近建青（近畿建築士会協議会青年部会）のホームページが新しく、見やすくなります。

近建青とは、近畿二府四県の青年建築士（四十〜四十五歳以下の若手建築士／男女は問いません）が集い、情報交換し、協働する楽しい場です。
みんなで見学会を企画したり、勉強会を開催したり、スポーツに励んだり（左写真は琵琶湖ペーロン大会）と、幅広い活動を行っています。

是非とも左記ホームページをご覧頂き、各府県の青年活動に積極的にご参加下さい。

ホームページアドレス
<http://www.kinkensei.com/>
或いは「近建青」でネット検索



ここで、大阪の青年分科会について簡単に紹介します。

二〇一二年八月末現在、三九名の若手建築士（入会は四十歳・任意継続は四十五歳まで）が所属しており、セミナー（右写真はパースセミナー）・見学会・勉強会・イベントなどを通して、自己研鑽・社会貢献活動を行いながら幅広い交流を行っています。

今年度は、協働・挑戦・継承をテーマとし、みんなで協力する・新しいことに取り組む・次に伝える、ことに重点を置いて活動しています。

会員であれば、無料で青年メンバー登録頂けますので、四十歳以下の若手建築士の皆さん、共に夢を追い掛けましょう。左記の青年ホームページにて活動概要を確認の上、ぜひとも連絡下さい。
<http://www.aba-osakafu.or.jp/osenen/>

事業委員会青年分科会代表 仙入洋



岡本森廣（上写真）
大阪府建築士会会長
全日本コンサルタント株式会社 技術部 次長
全国大会には必ず奥様を同伴する有名な愛妻家。
1女2男の父 現在、孫4人。

武庫川女子大学 甲子園会館

－旧甲子園ホテルの再生－

大喜多孝哉

大喜多孝哉

1982年 京都工芸繊維大学
住環境学科卒業
1982年 株式会社 大林組入社
1991年～1992年 ミラノ工科大学
現在 大林組大阪本店
インタースペース部 課長



エントランス（ホテル当時）



ダイニングホール（ホテル当時）



バンケットホール（ホテル当時）



ラウンジ（ホテル当時）

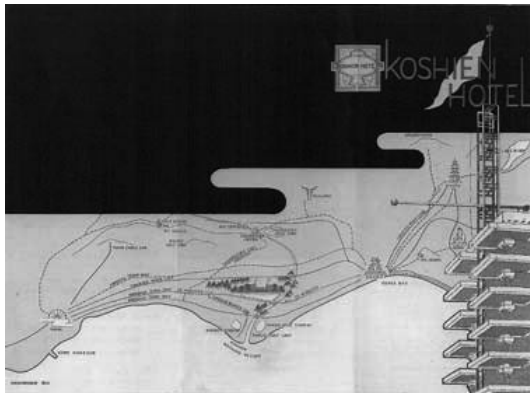


1. 甲子園ホテル誕生

(1) 建設の背景

大正 12 年、武庫川の洪水対策として、2 本の川（枝川と申川）がせき止められ、その川床約 80 ヘクタールを阪神電鉄が購入し、リゾート都市として住宅開発を進めることとなった。大正 13 年、甲子園球場ができ、それを皮切りに、数々のスポーツ・リクリエーション施設、テニスコート、阪神パーク、水族館などが建設されていた。

この開発の一環の中で、リゾートホテルとして甲子園ホテルが計画され、帝国ホテルの支配人であった林愛作が招かれ、フランク・ロイド・ライトの愛弟子であった遠藤新と共に計画がスタートした。当初、阪神電鉄は海の近くにホテルの建設を考えていたが、林と遠藤は、武庫川脇の、豊かな松林と水辺を持ったこの風光明媚な土地にほれ込み、彼ら二人の強い希望によりこの地が敷地と決まった。甲子園ホテルは、昭和 5 年に竣工、ライト設計の東京の帝国ホテルに次ぐ、日本に名だたる高級ホテルとして営業を開始した。



当時のホテルパンフレット

(2) 建築計画

シンメトリーな形態の中、水平線を強調したエレベーションに煙突の機能を持つ 2 本の塔がダイナミック、かつシンボリックに立つ。半地下の中央部に厨房があり、東ウイングにダイニングと西ウイングにバンケットホールが配されている。客室はクラスター状に配置され、片方のウイングにスイート 6 室、ダブルベッドルーム 3 室、シング

ルルーム 4 室が配置されている。エレベータから客室までの距離が短く、プライバシーも確保されていることを遠藤自身も特筆していた。客室は和室と西洋式バストイレが併設されており、日本に初めて誕生した和洋一対のスイートルームである。

開館直後の来賓として、新婚旅行を兼ねて欧州視察に出向く途上にあった高松宮夫妻を迎えた。また、山本五十六やペーブルース、画家の藤田嗣治などの各界の有名人が滞在している。

2. ホテル後の変遷から教育施設へ

(1) ホテル後の変遷

ホテル時代の華々しい時代の後、戦争という悲劇にも会い、ホテルとしての命は短く、14 年間で終えることとなった。昭和 19 年には海軍病院として収用され、終戦後はアメリカ軍の施設（将校宿舎・クラブ）として使用された。昭和 32 年に大蔵省の管理下に戻ったが、建物は放置され、老朽化が進んだ。取り壊しの危機を救ったのが、当時の武庫川学院理事長、公江喜市郎氏である。「この建物をぜひ後世に残したい」という強い熱意が大蔵省に理解され、昭和 40 年、払い下げ公募により武庫川学院が譲り受け、「教育施設 甲子園会館」としての再生がスタートした。

(2) 教育施設としての変遷

昭和 40 年以降現在に至るまで、大きな変遷とそれに伴う改修は 3 度あった。譲渡時、教育施設・学生寮として生まれ変わるため、内装改修と外装の全面改修が行われた。7 年後、北側の敷地を取得し、前庭のしつづえが整えられた。

以降 1990 年まで、増加する学生に対応するため、講義室や実習室としての改修を行いながら活

用してきた。

その後、時代の要請を受け、大学院、生涯学習の場が、甲子園会館に求められ、1990 年 生涯学習の場として オープンカレッジが開校し、大学院が移設、生活美学研究所が設立された。その際、内装改修、外装全面改修、南側の日本庭園復元工事が行なわれた。これにより、ホテル当時の水辺も復活し、それらの業績により、第 1 回「西宮市都市景観形成建築物」に指定されている。

1995 年阪神大震災を受けたが、前回の改修・保全工事が功を奏してか、ガラスが一部割れた程度で、大きな被害を受けることはなかった。

(3) 建築学科新設と大改修

2006 年、学院は新たな計画として、建築学科の新設をこの地に定め、建築学科のための施設整備と安全確保（耐震補強、石材の補強）の大改修を行なった。また、この改修工事では歴史的建築物としての意匠・品格を継承することが大きな課題であった。内装の色彩・仕様決定に関しては、コア抜きによる既設壁塗膜の分析調査を行い、また、ホテル当時の従業員のの方にヒアリングを行うなど、ホテル時代の忠実な復元に心がけた。

外装石材に関しては、意匠保存に加えて安全性を確保するため、ひび割れ状況をひとつひとつ調査し、落下対策として既設石材をそのままの状態アンカーにて補強固定を行い、アンカー孔の処理に既設石材の粉末を利用するなど、風格の維持に努めた。

補強案の作成に当たっては、当初の外観、内部空間の質、建築学科のキャンパスとしての機能を損なうことのないよう、建物内部側で適切な位置を捜し求め、耐震壁を増設する補強とした。また、本建物のシンボルでもある東・西の高い尖塔〔煙突〕（かつては暖炉煙突として使用）の補強においても、内部の損傷が著しい部分は、補修や炭素繊維板による補強を行い、外観を変えることなく耐震性を確保した。

その後も、より高い安全性とより良い環境を確保する為、引き続き耐震補強工事や改修工事を全館にわたり毎年計画的に進めている。今年（2012 年度）の工事で耐震性は設計目標に達する。

3. 竣工時の長寿命への貢献項目

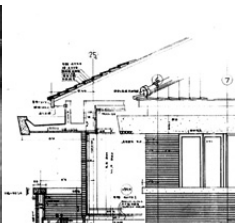
長寿命建築に役立っている、ホテル竣工当時から工夫（テクノロジー）を次に示す。

(1) 屋根

コンクリートスラブの陸屋根の上に木造で小屋組みを行い、瓦を葺いている。2 重屋根により下



小屋組内



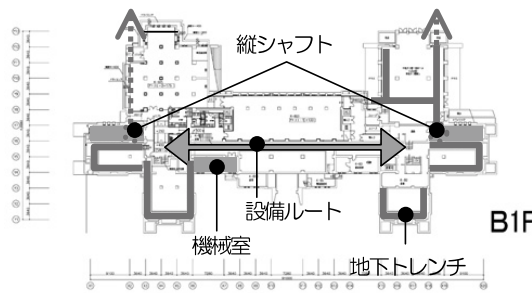
の階への漏水防止・断熱効果・躯体保護に役立っている。また、瓦の葺き替えも行ないやすい。

(2) 石材

師匠のライトは帝国ホテルで外装材に大谷石を使い、ご存知のように劣化が激しく、見るも無残な状況になってしまった。しかし、遠藤は耐久性が高いとされる日華石、（当時は「千歳石」と呼ばれていた）を使い、若干の劣化はあるものの補修を行う程度で済み、現在でもその石肌を見せてくれる。

(3) 設備スペース

そして何といっても時代への対応に役に立っているのが、メンテナンス可能な設備スペースである。建築計画と設備計画が融合した明確な設備ルートが、度重なる改修に役立っている。



4. 甲子園会館の運用・活用

建築学科のキャンパスとなった現在でも、学生のみならず生涯学習施設である「武庫川女子大学オープンカレッジ」、「生活美学研究所」のキャンパスでもあり、シンポジウム・コンサート・写真展などの各種イベント、及び建物見学会にも積極的に対応するなど、地域社会に開かれた施設として多くの人が利用できるよう学院により運用されている。そして、建築を志す学生達が直に触れて学べる本当に羨ましい生きた教材となっている。

武庫川学院のこの建物に対する並々ならぬ愛情により、取り壊されることなく、使用機能を変化しつつも、外観はもとより、主要な部分は継承され、貴重な文化遺産として後世へ受け継がれている。それも単に存在するだけの文化遺産ではなく、学院のみならず地域社会を含め、実際に活用される建築物として存在している。また、建物だけではなく、周辺敷地を少しずつながら取得を続け（1965 年の払い下げ以降、12 回に分けて周辺の敷地を取得）、竣工当時をのしぐ豊かな自然環境を構築する努力が続けられている。まさに遠藤新が当時、建築の佇まいのインスピレーションを得た周辺環境をも守られている。2007 年、敷地南側には建築スタジオも新築され、名実ともに文教地区である地域のシンボルとして新たな価値を加えた運用が進められている。

このような歴史的建造物が未来へ受け継がれるには、建物本来の性能・工夫、現代のテクノロジー、そしてなにより、その建物を時代に合わせて活用していこうとする人々の熱意が必要である。



庭園（現在）



南側テラス（現在）



教室



アトリエ（旧厨房）



スタジオ（旧ダイニングホール）



イベントへの活用

INFORMATION

Sponsorship

建築士会からのお知らせ

平成24年度 建築士定期講習

11/22 CPD6単位

建築士事務所に所属の一級・二級・木造建築士で、平成21年度に建築士定期講習を受講された方、及び平成21年度以前に建築士試験に合格した建築士の方で建築士定期講習をまだ受講していない方は、平成24年度中に当該講習の受講が必要です。

- 講習日・会場
- 日程 11月22日(木)
- 時間 9:30～17:30(受付は9時より)
- 会場 大阪府商工会館
大阪市中央区南本町4-3-6
- 定員 200名
- 申込締切日・受講料
- 10月26日(金) 申込書必着
- ※大阪での申込受付は郵送のみです。
必ず簡易書留郵便にてご送付ください。
- ※定員に達し次第、受付を終了します。
- 受講料 12,900円(消費税含)
- 申込先・申込書配布場所
- 大阪府建築士会事務局
大阪府建築士事務所協会事務局
- ※申込締切日まで営業時間内に随時配布(無料)。
- ※定員に達し次第、配布を終了します。
- ※申込書はホームページからダウンロードも可能です。
- 詳細 http://www.jaeic.or.jp/k_teiki-form_download_h24.htm

平成24年度既存木造住宅の耐震診断・改修講習会《限界耐力計算講習会》

10/11・12/7 CPD6単位

本講習会は、木造住宅の耐震診断・改修に関係する技術者の方々が最新の技術を受習され、今後の業務に活用されますよう、大阪府マニュアルに基づいて行うものです。

日時 10月11日(木)、12月7日(金)
各日共10:00～16:30

会場 大阪府建築健保会館6階ホール

定員 各100名(申込先着順)

受講料 会員6,000円 一般8,000円

テキスト代金 3,500円

平成24年度既存木造住宅の耐震診断・改修講習会《一般診断法講習》

10/23・11/27・12/18 CPD5単位

日時 10月23日(火)・11月27日(火)・
12月18日(火) 各日共11:00～16:30

会場 各日共大阪YMCA国際文化センター2階ホール

定員 各200名(先着順かつ希望順の申込
受付・定員になり次第締切)

受講料 会員5,000円 会員外9,000円

テキスト代 7,000円(2012年改訂版木造住宅の耐震診断と補強方法)

平成24年度既存鉄筋コンクリート造建築物の耐震診断・改修指針講習会

10/30～31 CPD1日5単位

日時 10月30日(火)～31日(水)の2日間
①10:30～16:00②10:30～16:30

会場 大阪府建築健保会館6階ホール

定員 100名(申込先着順)

受講料 会員8,000円 一般10,000円

テキスト代金 14,000円

平成24年度既存鉄骨造建築物の耐震診断・改修指針講習会

11/13 CPD6単位

日時 11月13日(火) 10:00～17:20

会場 大阪府建築健保会館6階ホール

定員 100名(申込先着順)

受講料 会員6,000円 一般8,000円

テキスト代金 8,800円と5,000円の2種

建築士法にもとづく「建築技術講習会」平成24年度 第4回 ～エコ～

11/16 CPD3単位

建築士法第22条の4第5項に基づき、平成24年度第4回目の建築技術講習会を実施します。本講習会は年6回のシリーズで、効率よく広範囲の学習をしていただけるよう、各回の内容が異なります。

日時 11月16日(金) 13:30～16:15

会場 大阪府建築健保会館6階ホール
大阪市中央区和泉町2-1-11

内容 ・外断熱とロックウールの最新事情
・再生エネルギーの全量買取制度と太陽光発電

定員 150名(定員に達し次第締切)

受講料 建築士会会員2,000円、後援団体
会員3,000円 一般4,000円
(テキスト代金)

建築士の会 東大阪 わくわく探検(駅前シリーズ)第12弾 近鉄奈良線若江岩田駅から花園公園へ(若江岩田・花園周辺史跡巡りと施設見学)

11/10 CPD3単位

東大阪市に在住又は在勤の会員の方を対象に活動している「建築士の会東大阪」では、毎年秋に、わくわく探検(駅前シリーズ)を開催しています。昨年より、従来の史跡・建物探訪に新しい企画「おとなの社会見学」を加え、より充実した内容で開催致します。今回は、高校ラグーマンのメッカである近鉄花園ラグビー場のバックヤード及び花園公園地下治水施設の見学もコースに組み入れています。建築士の方はもちろん、一般の方にも充分満足して頂けると思っております。途中恒例の賞品の当たるクイズなどのアトラクションも御用意しています。皆様のご参加をお待ちしております。

日程 11月10日(土)

集合 近鉄奈良線若江岩田駅改札口

解散 花園公園

スケジュール

9:00 受付開始

9:15 散策出発

12:15 クイズの回答、商品授与

12:30 解散

募集 50名(申し込み先着順)

参加費 会員1,000円 会員外1,500円

※参加証は実施1週間前に出状します。

違反建築防止週間

「住みよいまちづくりのために
～安全・安心な建築物の推進に向けて～」

期間 10月11日(木)～10月17日(水)

「エコを考える」第39回セミナー 再生可能エネルギーを考える ～環境に優しいエネルギー 太陽光発電のすべて～

11/28 CPD2単位(予定)

今年の7月から再生可能エネルギーで発電した電力を、電力会社が固定の価格で全量買い取ることを義務付ける制度が施行されました。建築士会の皆様も、お客さまから太陽光発電について聞かれたり、設計する機会も多いことでしょう。このセミナーを通じて、基礎的な制度の内容、施工例など今後の知識としてビジネスに生かしてください。

日時 11月28日(水) 16:00～17:30

会場 TOTOテクニカルセンター大阪会議室
大阪市中央区久太郎町3-6-8
御堂筋ダイワビル

内容 ・再生可能エネルギーの固定買取制度について
～太陽光発電の実施工例の紹介～

講師 三菱電機住環境システムズ株式会社
太陽光発電システム事業推進室
江崎洋之助

・省エネルギー商品の紹介
～驚くような省エネ機器が商品化されている～

講師 三菱電機住環境システムズ株式会社

参加費 会員500円 会員外1,000円

定員 80名(申込先着順)

建築士のためのお茶会勉強会

10/17・10/23

建築士の礼儀作法のひとつとして、お茶の作法を学ぶため毎月開催している勉強会です。

日時 10月17日(水)、10月23日(火)
18:30～20:30頃まで
(原則毎月第3水曜日及び第4火曜日)

費用 年会費6,000円+1回2,500円
(年会費はキャンセル時の水屋料などのため、但し途中入会の場合の年会費は年度末までの月数×500円となります。)

先生 藤井宗照(そうき)先生

本会の催し参加申込方法

FAX・メール・郵送で、催し名、参加者名、会員 No、勤務先、参加証送付先住所、同電話 & FAX 番号(自宅又は勤務先)を明記の上、事務局までお送り下さい。

問合せ・申込

大阪府建築士会事務局
〒540-0012 大阪市中央区谷町3-1-17
TEL.06-6947-1961 FAX.06-6943-7103
メール info@aba-osakafu.or.jp
HP <http://www.aba-osakafu.or.jp/>

Administration

行政からのお知らせ

違反建築防止週間

「住みよいまちづくりのために
～安全・安心な建築物の推進に向けて～」

期間 10月11日(木)～10月17日(水)

国土交通省及び各特定行政庁においては、建築基準法令違反の建築物の是正及びその発生予防に努めており、その一環として、全国一斉に「違反建築防止週間」を定めて実施しています。人生の中で最も大きな買い物であるマイホームに重大な欠陥があっては大変です。適切な工事監理が行われると共に、建築基準法に定められた中間・完了検査を受検し、欠陥のない適法な住宅を供給できるよう、建築士の皆さんに大きな期待がよせられています。詳細は大阪府住宅まちづくり部建築指導室建築安全課のホームページをご覧ください。また、違反建築防止に關するパネル展を下記の場所・日時において開催します。

- ①大阪府咲洲庁舎1階
10月1日(月)～10月 31日(水)
(土曜日・日曜日は除く)
- ②大阪住宅センター花博展示場
11月17日(土)～11月 25日(日)
(水曜日は除く)
- 問合せ 大阪府住宅まちづくり部建築指導室建築安全課
Tel.06-6941-0351 内線4326・6282
http://www.pref.osaka.jp/kenshi_anzen/anzen_kaiji/campaign.html

平成24年度大阪府デザイン・オープン・カレッジ

今日的なデザイン活用・導入に関する研修セミナーを10月下旬より順次開催します。

■勝てるデザイン戦略とブランド構築

「時代の文脈を読み抜き、売れる商品デザイン開発力をつけるには」

10月24日(水)・31日(水)

講師 奥田充一

■こどもの感性に学ぶ!

「プレイフル・デザイン・カード」を使ったデザイン発想演習

11月12日(月)・13日(火)

講師 太刀川英輔、川本誓文

■デザインの原点に帰る

デザインをするということの本質

11月21日(水)・28日(水)

講師 塚本カナエ

■後悔しないためのデビュー戦略

広告的アプローチに学ぶ「顧客接点」

12月4日(火)・11日(火)

講師 中島公次

以下、各セミナー共通

会場 マイドームおおさか4階セミナー室
大阪市中央区本町橋2-5

時間 14:00～17:00

受講料 8,000円(2日間) 定員 30名

問合せ 大阪府産業デザインセンター
Tel.06-6949-4791
<http://www.pref.osaka.jp/mono/oidc/>

Others

その他のお知らせ

まちあるきプロジェクト

「ぶらり大阪"景観"ウォーク」住吉区編

一般市民を対象として、建築士の解説を交えながら、住吉区で大阪市に登録された都市景観資源を含むコースのまちあるきを行います。その際、参加者が良いと感じた景観を「写真」または「スケッチ」していただき、大阪府建築士事務所協会主催の建築士事務所キャンペーンに応募していただきます(応募は自由)。

主催 (社)大阪府建築士事務所協会

日時 10月27日(土) 13:30～16:30

参加費 無料

問合せ (社)大阪府建築士事務所協会
Tel.06-6946-7065

秋期・生涯学習文化講座「近代建築探訪」(5) 「淀屋橋周辺の優れた都市資産・近代建築見学」

「近代建築探訪」(5)は、淀屋橋周辺の近代建築の現地見学会です。旧住友銀行本店、大同生命ビル、大阪倶楽部、日銀大阪支店(辰野金吾設計)などの近代建築の見学をします。

日程 10月9日(火)、10月23日(火)

集合場所と時間

大阪市役所正面(御堂筋側) 13:30集合

講師 明治建築研究会代表 柴田正己

問合せ 澤標(みおつくし)
Tel.06-6944-0869

2012年 電炉鋼材フォーラム「大阪会場」

主催 普通鋼電炉工業会

日時 11月13日(水) 13:00～16:30

会場 マイドームおおさか2階Bホール
大阪市中央区本町橋2-5

参加費 無料

申込締切日 11月2日(金)
但し定員に達し次第、締切

問合せ・申込 普通鋼電炉工業会
Tel.03-5640-1122
<http://www.fudenkou.jp>

第58回表具内装工藝展

本展は、大阪府表具内装協同組合員である表具師が、日頃の努力と技術研鑽の発表の場として催すものです。

主催 大阪府表具内装協同組合・組合青年部・組合技能士部会・大阪府表具高等職業訓練校

日時 10月13日(土)、10月14日(日)
10:00～16:30(14日は16:00まで)

会場 大阪くらしの今昔館3階展示室
大阪市北区天神橋6-4-20

入場料 無料

問合せ 大阪府表具内装協同組合
Tel.072-226-5645

団地再編住みよいまちへ 2012 海外等の団地再生先進事例の動向とわが国におけるストック活用型団地再編への展望

一関西大学 戦略基盤・団地再編プロジェクトからの提案 ―

本展では、関西大学戦略基盤・団地再編プロジェクトのこれまでの研究成果(海外等の団地再生先進事例の紹介及び模型による空間比較)を報告し、わが国の具体の団地を舞台に、ストックを活かしながら団地の構造(仕組み)を再編し、多様で自立的(持続的)な“まち”へ再生する再編技術提案の一端を提示いたします。

■展覧会

日時 11月8日(木)～11月12日(月)
10:00～17:00(最終日は15:00まで)

会場 大阪くらしの今昔館企画展示室
大阪市立住まい情報センター8階
大阪市北区天神橋6-4-20

■関連講演会

日時 11月17日(土) 14:00～17:00

会場 大阪市立住まい情報センター3階ホール

講師 江川直樹(関西大学教授)

増永理彦(神戸松蔭女子学院大学教授)

定員 100名(先着順)

問合せ・申込 大阪市立住まい情報センター
住情報プラザ
「団地再編・住みよいまち2012」係
Tel.06-6242-1160
<http://www.sumai-machi-net.com/>

大阪市立美術館

特別展 北斎 風景・美人・奇想―

世界的に有名な浮世絵師・葛飾北斎の名品の数々を集めた展覧会を大阪市立美術館のみで開催します。本展では、富士を描いた風景画はもちろん、重要文化財に指定される「潮干狩図」「二美人図」など、肉筆画・版画・版本約370件を展示します。

会期 10月30日(火)～12月9日(日)

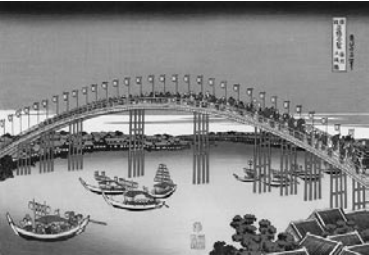
時間 9:30～17:00
(入館は閉館30分前まで)

休館日 月曜日(祝日の場合は翌日)

観覧料 一般1,300円

会場 大阪市立美術館
大阪市天王寺区茶臼山町1-82
(天王寺公園内)

問合せ 大阪市総合コールセンター
Tel.06-4301-7285
<http://hokusai2012.jp/>



北斎―風景・美人・奇想― 「摂州天満橋」

国立国際美術館

エル・グレコ展

ベラスケス、ゴヤとともに、スペイン三大画家と呼ばれる巨匠エル・グレコ。本展では代表作の他、初期のイタリアでの修行時代の作品や、流行画家として多くの注文に応えたトレド時代の作品、教会建築全体の空間演出も手がけていた最盛期の巨大な祭壇画も紹介します。今回の展覧会はエル・グレコの油彩画50点以上が出品されます。これは日本で開かれたエル・グレコの個展で過去最大の規模となります。日本初公開の作品も数多く含まれます。

会期 10月16日(火)～ 12月24日(月・祝)
時間 10:00～17:00(金曜は19:00)
(入館は閉館30分前まで)

休館日 月曜日(ただし12月24日(月・休)は開館)

観覧料 一般1,500円

会場・問合せ 国立国際美術館
大阪市北区中之島4-2-55
Tel.06-6447-4680

国立民族学博物館

特別展 世界の織機と織物―織って！みて！織りのカラクリ大発見

織りの技術は人類史の中枢技術です。新石器時代に始まる織りの技術の延長線上には、産業革命やIT革命があります。世界の織機と織物が展示される「みんなく」の特別展で、織って！みて！「張力をそなえたタテ糸にヨコ糸を組み合わせる」という、単純にして複雑な織りのカラクリのすべてをあなたも体験してください。

会期 11月27日(火)まで

時間 10:00～17:00
(入館は閉館30分前まで)

休館日 水曜日

観覧料 一般830円

無料観覧日 11月3日(土・祝)、
11月17日(土)、11月18日(日)

会場・問合せ 国立民族学博物館
吹田市千里万博公園10番1号
Tel.06-6876-2151

大阪歴史博物館

特別展 ウクライナの至宝―スキタイ黄金美術の煌めき―

ウクライナは日本から約8,000km西に位置する国で、東側にはロシア連邦、西側ではポーランドに接し、黒海をはさんで南側にはトルコ共和国があります。昨年は独立20周年に当たり、今年は日本との外交関



エル・グレコ展「神殿から商人を追い払うキリスト」

係樹立20周年となります。これを記念して、ウクライナ国立歴史博物館およびウクライナ歴史宝物館が所蔵する国宝級の資料を展示公開します。

会期 11月25日(日)まで

時間 9:30～17:00(金曜は22:00)
(入館は閉館30分前まで)

休館日 火曜日

観覧料 一般1200円

会場・問合せ 大阪歴史博物館
大阪市中央区大手前4-1-32
Tel.06-6946-5728

京都国立近代美術館

特別展 近代洋画の開拓者 高橋由一

《鮭》や《花魁》(いずれも重要文化財)、あるいは《豆腐》《山形市街図》を描いた画家として知られている、明治時代を代表する洋画家、高橋由一の全貌を紹介する展覧会です。本展では、由一の代表作を網羅し、初期から晩年までの作品を一堂に紹介するほか、イメージソースとなった広重や司馬江漢らの作品、あるいは「由一史料」と呼ばれる文書類もあわせて展示し、「近代洋画の開拓者」高橋由一の魅力を探ります。

会期 10月21日(日)まで

時間 9:30～17:00(金曜は22:00)
(入館は閉館30分前まで)

休館日 月曜日
10月8日(月・祝)は開館、10月9日(火)は休館

観覧料 一般1300円

会場・問合せ 京都国立近代美術館
京都市左京区岡崎門勝寺町
Tel.075-761-4111

LIXILギャラリー大阪 山と森の精霊 高千穂・椎葉・米良の神楽 展

記紀神話の舞台・宮崎から、神楽の宝庫といわれる高千穂、椎葉、米良の3地域に伝承される夜神楽と九州の民俗仮面を紹介します。自然と密着した暮らしの中で受け継がれてきた、神々と交歓する一夜の儀式と仮面の迫力を写真、映像、再現展示や実資料などから臨場感豊かにご覧いただけます。

会期 11月22日(木)まで

時間 10:00～17:00

休館日 水曜日

観覧料 無料

会場・問合せ LIXILギャラリー大阪
大阪市中央区久太郎町4-1-3
伊藤忠ビル1F LIXIL大阪水まわりショールーム内
Tel.06-6733-790



山と森の精霊 高千穂・椎葉・米良の神楽 展

広がってゆく、スマートハウス。 そこに、大阪ガスの「ダブル発電」。

家庭用燃料電池「エネファーム」と太陽光発電を組み合わせた「ダブル発電」。

昼も夜も雨の日も、24時間、365日発電でき、自宅で使う電気の

約80%*をまかなえる「ダブル発電」が、

家を、暮らしを、どんどんスマートにしてゆきます。



ガスで実現するスマートハウス が、スマート!

※大阪ガス調べ

お問い合わせ先：大阪ガス株式会社 リビング事業部 大阪リビング営業部 都市開発チーム 〒550-0023 大阪市西区千代崎3丁目南2-37
TEL：06-6586-3241 FAX：06-6586-3259 ホームページ：http://www.osakagas.co.jp

Design Your Energy 夢ある明日を

大阪ガス

理事会報告

文責 本会事務局

日時 九月十二日(水)十六時～十七時三十分

場所 本会会議室

出席 理事四名(委任七名)、監事二名

名誉会長、顧問、相談役他七名

■会長あいさつ

公益移行問題を契機に事業活動の見直しや組織のスリム化を図っている現状に照らして、会員数約一〇〇名あたりに理事一名を目標とした理事数の減少を示唆した。

(一) 会計報告

八月末までに、会費収入で対予算八六%だが事業収入は四二%と低迷している。支出は特に人件費四三%と抑えている。全体としては、対予算収入六〇%支出四〇%の達成率を報告した。

(二) 退会者の慰留方策

慰留方策は、前月末の退会予定者リストを翌月初旬に入会時の紹介者及び理事等に事前送付して慰留活動をお願いする。慰留が叶った退会予定者は同月理事会での退会承認対象から除外する。

(三) シックハウス研究会の解散に伴い、二五、〇五円を本会に寄附いただいた。

(四) 既存木造耐震診断・改修講習会は「木造住宅の耐震診断と補強方法」が改訂されたことで、二十四年度以降に受講された技術者が補助金交付の対象になる。

(五) 大阪府まちまるごと耐震化支援事業登録事業者登録申請を完了した。

(六) 大阪府公募プロボにおける建築士会CPDが採用され、建築CPD情報提供制度が認める範囲で登録認定される。

(七) 登録センター移転に伴う覚書を本会と事務所協会の間で交わすことが承認された。

(八) 公益移行申請準備は法務課より事業関係の再質問の待機中である。

建築相談

建築士の見たトラブル事例(三)

工事監理の重要性

文 橋本頼幸

今月の「建築相談コーナー」は、相談委員会の井戸田精委員から話題提供いただきました。

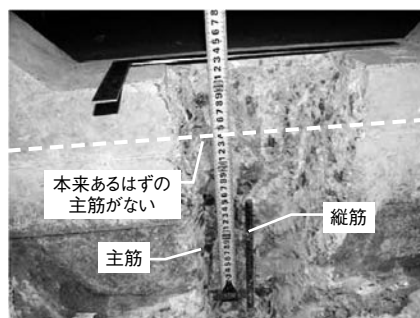
設計事務所所属する建築士の業務は、設計監理が主たるものになります。設計業務は、建築主の要望に従い、建物を設計するということになりませんが、設計された図面通りに施工が行われていることを現場で確認する監理業務もまた非常に重要な仕事です。建築士法でも、これらの仕事は、建築士だけの独占業務と位置づけられています。また、建築士法二条に「工事監理」とは、その者の責任において、工事を設計図書と照合し、それが設計図書のとおりを実施されているかいないかを確認することという」と明記されています。本来は重要であるはずの工事監理が十分になされていないことから発生したトラブルのお話です。

本件トラブルの依頼者は、平成十年に新築で入居。その後、平成十三年に南側外壁タイルの一部がはがれ落ち、平成十四～十五年に、階リビングドアが傾き、床にするようになり、和室縁側障子も動かなくなったそうです。そして、平成十六年十月に、依頼者が室内壁クロスや基礎に亀裂を見つけ、施工者に調査をしてもらいました。しかし、その後も進展がないため、平成十九年末に建築士による調査が行われました。

木造2階建て(軸組工法)の住宅で、布基礎の人口口下部に二五ミリの亀裂がありました。現場は、丘陵地にある古い造成宅地であり、



↑人口口の亀裂幅は2.5mm
主筋がなく切断されていた↓



本来あるはずの主筋がない
縦筋
主筋

新築時に二程度盛り土をしていました。周辺の状況から悪い地盤とは考えにくいため、当初は盛土が原因で基礎が折れて傾いたものと考えました。しかし、それでは「布基礎の人口口下部の亀裂が二五ミリの開口している」ことを説明できないため、亀裂の入った部分の基礎コンクリートをはつりとり、鉄筋の状態を確認しました。すると、布基礎上部の主筋がなく、切断されていることが判明しました。

編集後記

筑波幸一郎・牧野高尚・荒木公樹「建築人(けんちくびと)」で特集している矢田朝土さんは、私たちと同じ大阪府建築士会の会員で、京都をベースに活躍する若手建築家です。当会の「渡辺節賞」をはじめ、建築士会連合会や建築家協会等の全国的な賞も多数受賞されています。聞き手のわれわれと同じ世代ですが、矢田さんの建築に対する深い思索と真摯な姿勢に感銘を受けるとともに、自分自身に立ち返る貴重な機会となりました。

もし、設計図書通りに施工されていることを建築士が現場確認していたら、このような工事が行われることはなかったでしょう。

建築工事において、施工方法は、施工者によって多かれ少なかれ違うことがあります。建築士は、施工を理解し、設計図書に込めた建物の性能が確保できるように指導監督することが必要で、工事監理でもっとも大切なことだと考えます。

近年は役所の検査が厳しくなり、瑕疵担保保険の検査もありますので、こうした状況は減少しているとは思いますが、しかし、これらの検査はあくまでも長い工程の中の「ある時点」での検査に過ぎません。工事期間全般にわたって建築士が現場に立つて、工事監理をすることの大切さを実感しています。

表紙でとりあげている矢田さんが手がけられた「江戸堀 若木」は、竣工後十年を経た蕎麦店です。インタビュでも設計過程のくだりがありますが、クライアントと建築家の協働作業がうまく結実した作品です。蕎麦もさることながら、ともに供される一品料理も非常に美味で、料理とそこで働く人、建築が一体になって醸し出すものには清々しさを感じます。表紙の写真は、「大阪ホンマもん」等でお世話になっている写真家・田龍哲也さんによる撮り下ろしです。少しでもその空気感を感じとっていただければ幸いです。





江戸堀 若木 矢田朝士

本格的な自家製手打ち蕎麦の店である。場所は大阪の北、ビジネス街のまっただ中にあり、この店もテナントビルの一階に入っている。

そば打ち職人でもある店主は蕎麦に対して真摯に取り組まれ、誠実に美味しい蕎麦を提供しようと考えておられた。私がすべき事は、この姿勢を素直にデザインに写し込み、客にこの思いを伝える最良の環境を提供することである。きちっとした素材でつくり、使い続ける事で味が出て、記憶の断片になるような店である。

飲食店は中の様子が分らないと入りづらい。しかし中に入ってしまうと今度は外のひとと距離を置いて欲しくなる。若木ではそれらを窓の意匠でカバーしている。

行灯をモチーフにした窓はアイキャッチとして設えられているが、客にとっては外光を取り入れながらアイレベルでの視線の交差を遮り、上下に振り分けられたスリット部分から外の様子を窺えるようにしている。

そして客席は入口から奥まり独立した溜まりにしている。動線を考えると入口、客席、調理場の順なのだが食事の為の空間を優先した。客を隠す間仕切り壁もスタッフの立場からは余計なものだろう。しかし、落ち着いた雰囲気、お客さんにとっての居場所としての空間を造りたかった。

この店で多くの方々が蕎麦を楽しんでくれるだろう。設計の細かい事はどうでもいいのだ。「美味しかった」「いい店だった」とだけ思ってもらえればそれでいい。

撮影：田籠哲也

■プロフィール

1967年 京都府生まれ
1992年 神戸大学工学部
環境計画学科卒業
1992年 無有建築工房
1998年 ATELIER-ASH設立

■建物データ

設計：ATELIER-ASH
施工：三谷工務店
白坂悟デザイン事務所
所在地：大阪市西区江戸堀
竣工：2002年

